
UV Alternative The unsung heroes of the war

珈琲ドランカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V - L U V A l t e r n a t i v e T h e u n s u n
g h e r o e s o f t h e w a r

【Nコード】

N 9 4 0 9 W

【作者名】

珈琲ドランカー

【あらすじ】

何故か前世の知識を持ったまま生まれてしまった主人公。なんとそこは死亡フラグ満載なM U V - L U Vの世界。取りあえず第4計画の成功を応援したいが、直接関わるのも難しい。さあ、どうする主人公。

Phase 00 (前書き)

作者は2次小説書くのは初めてな上に、文才が皆無です。

話の展開上、オルタ編に入るまでだいぶかかる予定です。また、各種設定は本やwikiで調べながら書いていきますが、矛盾が出てくるのが予想されます。大らかな心で読んでいただければ幸いです。それが無理な方は今すぐにブラウザバックして下さい。

Phase 00

絶望の地平に朽ち逝く魂の残照――

滅びゆく世界に燃え上がる命の炎――

――そして紡がれるもう一つの世界――

それは未来を知るが故の責務――

未来を改変することへの苦悩――

それでも過去よりも、今日よりも、明日を信じて――

それは――

とてもちいさな

とてもおおきな

――とても、たいせつな――

それはあいとゆうぎのおとぎばなし

Phase 00 (後書き)

マブラブクロニクルをやったら、久々にマブラブにハマりました。
そんなこんなで大枠のプロットはありますが、ぶっちゃけ見切り発
車です。

感想・御指摘があればよろしく願います。
また、誹謗・中傷は勘弁して下さい。

Phase 01 (前書き)

一先ず出来はさせておき、書いたのを投稿してみました。

Phase 01

——西暦1986年 8月19日 帝都・とある武家屋敷——

「国産戦術機瑞鶴が米国産戦術機を破る、か……」

今朝の帝国新聞の見出しには、豪く大々的にそんなことが書かれていた。

「まあ、予想通りだな」

（さて、ここがマブラブの世界で今のところ持っている知識道理に推移しているわけだが、今後どのように動くか考える必要があるな）

新聞を見ながら何やら凄まじいことを言っている彼は、深山諒という帝国内でも有数の有力武家深山家の二男である。

そう彼には前世（？）の記憶というべきものがある。その為5歳でありながら新聞の内容を理解するという通常では考えられない様なことが出来るのだが。

まあ、はたから見れば5歳児が新聞を広げて何か呟いているのだから何とも不思議な光景に映るのだろうが……

（しかし、オルタネイティブ？の成功が地球を救う鍵になるのは知っているが、そもそもあれは国連の最高機密に当たるし、私が介入出来る代物でもない。だとすれば私に出来るのは間接的に手助けすることぐらいか。ふむ……）

首をかしげながら何やら考え込んでいるのを見た母親のあやめが夫である一臣に尋ねる。

「あの子は何を考えているのかしらね、あなた」

「さあ？ 私にはわからんが、将来帝国を支える武家の人間が利発なのは喜ぶべきことではないかね？」

「ふん、父上あれは何も考えていませんよ」

一臣は、考えていることは分からないが、優秀なら問題ないと返す。そんな父親のどこか期待するような発言に、面白くなさそうな物言いで返したのは、3歳ほど歳の離れた彼の兄であった。

——西暦1986年 12月 帝都・深山邸——

「ふむ、戦術機及び関連兵器の開発となると技術廠で開発衛士かエンジニアになるのが一番か」

机に向かいそんなことを言っている彼の手元にある紙には、＜今後の行動計画＞とあった。そこにはいくつかの方針とそれに対するメリット・デメリットが記されていた。

その方針内容とは、

1. 戦術機に乗って戦果をあげる
2. 主要重要人物に面会する
3. 未来知識を活かす
4. 軍事力の底上げによる戦闘での損耗を減らす

とあった。

（しかし、軍部で動こうと思うなら発言力を付ける必要があるな。そのためには功績が必要…）

そう、軍部で何かしようと思うのならやはりそれ相応の階級が必要となるものである。例え能力が同一だとしても、少尉と少佐の発言では少佐の発言の方が選ばれる。当然ながら昇進しようと思うなら功績を残さねばならない。そして一番手っ取り早い功績が戦闘での功績である。

（一先ずは兵器廠に入る手段の模索と、自身の鍛錬が直近の目標だな。しかし鍛錬に関しては止められないと思うが、技術廠への口利きは難しい…か？ いや以前新聞に書かれていた瑞鶴をネタに振れば突破口ぐらいは開けるかな？ 後で父上に話をしてみるか）

そこまで考えて諒は手元の紙を机の引き出しに入れ、先ほど決めた目標を達成するために席を立ったのであった。

その日の夕餉が済み、各々が自由に過ごしている時間に深山邸の当主部屋では父子による会話が行われようとしていた。

「さて、諒よ、わざわざ二人きりで話をしたいということだが、一

体何かな？」

「父上。まず一つ目は私を鍛えて頂きたいのです」

「ふむ、それは構わないが随分と急な話だな」

息子が真剣な表情で切り出してきた内容の唐突さに、少々戸惑った様にもみえる父親に対し、諒は揺らぐことなく、明確な意思を持った声で告げる。

「確かにそうかもしれませんが。しかし、強くなるための近道はないと聞きます。であれば少しでも早くから始めることが大切だと思います」

「ふむ」

そう言って、腕を組みながら思索する父親を、諒は幾許かの緊張を伴った表情で見つめる。

「まあ、いいだろう。確かにそろそろ頃合いだと考えていたところだ。鍛錬を始めるとしよう」

「ありがとうございます」

父親の答えを聞いて諒は安堵した表情を浮かべたまま軽く頭を下げた。

（ふふ、いくら歳不相応に落ち着いているとは言え、まだまだそういうところは子供だな）

内心で息子の歳相応の様子をほほえましく思いつつも、先を促す。

「それで、1つ目はということ、他にも何かあるのだろうか？」

「はい、2つ目は戦術機について詳しく知りたいのです」

「これもまた、いきなりだな」

「そう……ですね。しかし私も将来衛士になると思いますし、何より国産戦術機である瑞鶴が米国産戦術機を破ったというのに興味を惹かれました」

「ああ、以前新聞に載っていたやつか」

息子が述べた理由に思い至ったのか、苦笑しながら頷くのであった。

「ふむ、まあいいだろう。しかし漠然と戦術機について知りたいと言っても、一体どのようなことが知りたいのだ？」

そもそも戦術機は軍事機密も関わってくるから教えられることも多いぞ?」

「そうですね。父上、整備兵が訓練校で使う教本等を手に入れることは可能ですか?」

と、諒はあらかじめ考えていた要望を述べる。

「整備兵の教本? そんなものどうする気だ? お前は衛士になるのだぞ」

「いえ、戦術機について学ぶのであれば整備兵の教本がいいのではないかと思ったからです」

戦術機の構造やシステムを知らなければ整備など出来る訳がなく、何も知らない人間を教育するために用いられる教本であれば、0から勉強するのにはもってこいである。

そのことに父親側も思い至ったのか、

「ふむ、まあ確かにそうかもしれんな。しかし、そのようなもの学

んでどうするつもりだ？不要とは言わんが衛士として余分な知識だぞ」

だが、一臣の言葉も事実であった。衛士になる過程で戦術機について最低限の基礎知識は得られる。それ以上のことを学んだところで使う機会はまずないと言ってよく、息子の真意を測りかねている為の発言であった。諒はそんな父親の考えを読み取ったのか、自分の考えを父親へ伝える。

「父上、私は戦術機の開発に関わりたいと考えているのです。そのためには戦術機について普通の衛士以上に知る必要があると考えているのです」

しかし、そんな息子の願いを一臣は苦々しく聞いていた。何故かと言うと深山家は有力武家、つまり近衛軍で赤を纏うことが許されている家柄であり、主な仕事は5摂政家の方々の護衛や随伴という所謂傍仕えである。武家の人間が戦術機の開発に携わることがないとは言わない。しかし赤を纏う者が関わるというのは、まず例を見ないことだったからだ。

「諒よ、それは自分の立場を理解しての発言だな？」

息子が自分の立場を理解しているかを確認するように尋ねると、

「はい父上、それは理解しております。しかし今現在私は特定の方へ傍仕えしているわけでもありませんし、私は二男ですから問題ないと思うのですが」

「いや、まあ、そうなのだが、な」

息子からそのように切り返されてしまい、どのように答えようか

と思案していると、そこへ口をはさむ者が現れた。

「あなた、いいじゃないですか」

「お前、そうは言うが……」

「そもそも戦術機開発と言えば十分誇れることですし、よろしいのではなくて？ それにいくら赤とはいえ、能力なきものが関われる様なものでもないわけですし」

諒が驚きながら振り向くとそこには、あらあらと言うように微笑を浮かべながらそんなことを口にする母親の姿があった。驚きながら母親を見ていると、

「諒、私はあなたがしたいようにすればいいと思っています。ですが先ほども言いましたが、戦術機開発とは能力なきものが関われるものではありません。そのことだけは心に刻みつけておきなさい」
「はい、母上」

諒は、母親からの援護の言葉と共送られた深山家からのコネは期待するな、というメッセージを理解した上で頷くのだった。そんな二人のやり取りを黙って見ていた父親はと言うと、

「そこまで覚悟が決まっているのであればよかろう。お前の好きにするとうい。今後お前に傍仕えの話が来たときは私の方から断りを入れよう」

「ありがとうございます、父上」

やれやれ、というような表情をしながら許しをくれた父親に対して、諒は頭を下げた。そしてもう話は終わりと言っても言うように、諒へ自室に戻るように言うのだった。

「さあ、もう今日は遅いから部屋へ戻りなさい」

「おやすみなさいませ、父上、母上」

「おやすみなさい、諒」

「ああ、おやすみ」

そう挨拶をして、部屋を出て行った諒を見送った二人は、

「ふふ、昔から落ち着いていて、確りした子だとは思っていましたが、もう将来について考えていたなんて、少し驚いたわ」

「そうだな、だがその分将来が楽しみでもあるよ」

「本当ね」

そんな風を楽しげに話す二人の声を聞いている者がいることに二人は気が付かなかった。

翌日、諒は父親と共に基地の一角に建てられた建物の前にいた。

「さて、今日から此処でお前を鍛えてもらうわけなのだが、ここは近衛軍の中でも武家の者が主に利用する道場だ。稀にだが摂家の方々も顔を出すから、言動には注意しなさい」

「なるほど、ここはその様な場所でしたか。しかし、道場なら自宅の物でもよかったのではないですか？」

そう、深山家をはじめ大半の武家には大小の違いはあるが、道場が備わっているため、諒の疑問は自然なものであった。そんな息子へ苦笑しながら答える。

「確かに、家の道場でも問題はないだろう。雅斗はそうしておるかな」

「では、何故私はこちらの道場なのですか？」

兄は自宅の道場で鍛錬し、自分は軍の道場で鍛錬するという父親の考えが分からず、首をかしげている息子に対し、今度は真面目な表情で答えを述べる。

「雅斗は、深山家を継ぐため、家の流派を覚える必要がある。また、今後傍仕えをするようになれば護衛としての腕も必要になってくるため、家の道場で集中的に教えているのだ」

「対してお前は開発衛士になることを目標としている。であれば武術の腕前を磨く以上に、多くの人間と交流を持ち、知見を広めることがお前の将来に生きてくると考えたからだ」

まだ自分の将来について語ってから半日と経っていないにも関わらず、自分の将来に役立つようにと考えを巡らせてくれた父親に対し、

「ありがとうございます」

諒は心からの感謝の意を示して深く頭を下げた。

「うむ、ここでの出会いを活かすも殺すもお前次第だ。励みなさい」
「御心遣い無駄にしないよう、また深山の名に恥じぬよう、精進致します」

鷹揚に頷く父親を見据えて諒は頷くのであった。

「さて、いつまでここにいても始まらん。話は通してあるが礼を失する訳にはいかん。挨拶に行くぞ」

「畏まりました」

息子の返事を聞きながら道場へ入ろうとしたところで、思い出したかのように諒に告げる。

「それと、教本の件だが今日話をするが、どうなるかわからん。暫し待ちなさい」

「お手数掛けて申し訳ありません」

恐縮する息子に対し一臣は気にした風もなく返す。

「何、この程度のことなら構わん」

そう言って、建物へ入って行く父親の後を諒はついて行くのだった。

——カン、カン、カン
——ダン、ダァン

道場へ繋がる扉の奥からは木刀のぶつかる音や床に叩きつけられ

る音など聞こえてくる。その音に緊張の様相を示した息子へからかう様に問いかける。

「何だ、音を聞いただけでもう臆したのか？ そんなことではこの先やっていけないぞ？」

「いえ大丈夫です。行きましょう」

父親から問いを受けたのが切掛けとなり気を引き締め直したのか、確りとした声色で答えたのだった。

「ふっ、そのくらいの気概は見せてもらわんと、な」

そう言いながら中へ入ると胴着を纏い木刀を携えた少年から早々に声を掛けられる。

「これは深山大佐、貴方がこの様な時間に此処へ顔を出すとは珍しいですね」

「これは芳樹様、おはようございます」

「うむ、おはよう。それでいかな用向きでこちらに？」

入って早々に出会った人間が九条家の人間であったことに内心驚きながらも、それをおくびにも出さず返答するのであった。

「本日からここで息子を鍛えて頂くため、御挨拶に参上した次第です」

「確か大佐の長男は既に鍛錬を始めていると聞き及んでいるが」

「おっしゃられる通り、長男は自宅の道場で学ばせております。鍛えて頂くのは、二男の方でして。諒、芳樹様に御挨拶なさい」

「はい父上。お初にお目にかかります。私は深山家が二男諒と申します。以後お見知りおきを」

「うむ、私は九条芳樹という、以後良しなに」

挨拶を交わした芳樹が感心したように言葉をかける。

「随分と確りした御子息ですね。まだそう歳ゆかぬ様に見えるが」

「息子は今年の11月で6歳となりました」

「ほう、その歳で先ほどの挨拶とはなかなか利発な御子息ではないか」

そんな会話がされているさなか、周りの音が消えたことを不審に思い、失礼にならない程度に周りを見てみると、何やら注目されていた。そんな諒に気付いたのか、芳樹は諒へ問いかける。

「周りを気にしている様だが、如何した」

「いえ、先ほどまでしていた音が止んだため、どうしたのかと周りを見ていた次第です」

問いかけに対しそう答えると、

「ふむ、皆の者、手を止めておるなら丁度よい。深山大佐の御子息が我らと共に学ぶとのことだ、良くしてやってくれ！」

九条が道場に居た者達へそう声をかけた。

「「「「「「はっ」「」「」「」」」」」」

道場に居た者が皆その言葉に頭を下げながら答えるのだった。

「これは！芳樹様、申し訳ありません」

「何、構わん。彼は深山家の人間であるのだし、何より我らも将来

有望な人間が加わることに否はない」

恐縮しきっている様子を気にする風もなく、闊達に振る舞う。

「諒よ、これから共に切磋琢磨しようではないではないか」

「はっ、非才の身ではありますが皆様に少しでも近づけるよう精進する所存です」

「うむ」

芳樹と諒が握手を交わしている傍らで、それを内心ハラハラしながら見ている父親の姿があったのだった。

「さて、皆の者鍛錬を再開しようではないか！」

「「「「「はっ」「」「」「」」」」

芳樹が手を止めていた者達へ声を掛け、鍛錬が再開されると芳樹は一臣に向かって仕事に行くように勧めるのだった。

「大佐も軍務が有るであろう、後のことは我々に任せたまえ」

「それではご迷惑かとは存じますが、よろしくお願いいたします」

「うむ、まかされよ」

「諒よ、皆様に迷惑をかけるなよ」

「心得ております」

そうして仕事へ向かう父親を見送る諒へ、芳樹が声を掛ける。

「さて、それでは師範の下へ行こうではないか」

「よろしくお願い致します」

師範の下へ向かおうと提案する芳樹へ頭を下げると、それを見た

芳樹は諒に向かって問題発言をする。

「諒よ、私に向かって敬語は必要ない」

「は？ いえ、芳樹様に向かってその様なことは……」

「私が良いと申しておるのだ、問題ないであろう？」

「いえ、しかし……」

芳樹のいきなりの提案に諒が煮え切らない反応をしていると、それに業を煮やした芳樹が命令口調でいう。

「諒よ、私に向かって敬語を使うな！」

「は、はい。わかりました。ですが、人前では御容赦下さい」

「うむ、流石に私もそのくらいは心得ておる」

流石に人前でそのようなことをすれば問題になるのを芳樹も承知しているようで、それは問題なく許可されるのであった。

「さて、それでは改めて師範の下に行くとしよう。ついて参れ」

「はい、わかりました。案内よろしく願います」

そう言って、二人は師範の下に行くのであった。

一方その頃、道場を辞した父親はというと、

（諒の奴芳樹様に迷惑を掛けていないか心配だ……。それにしても初日から芳樹様に目を掛けて頂けるとは強運というか、何というか、いやはや我が息子ながら末恐ろしい）

そんなことを考えながら、職場へと向かうのだった。

翌朝、基地に向かう道中では、父子の間でこんなやり取りが交わされていた。

「昨日一日道場で鍛錬してみてもうだった？」

「そうですね。」

まだ皆様の動きを理解出来るわけではありませんので、何とも言えませんが」

と、前置きをしつつ

「ただ、心構えや意識の高さには感服いたしました」

「ほう、さっそくいい刺激を受けたようだな」

息子から返ってきた答えに満足そうに頷きながら答える。そして、それを踏まえて息子へ助言する。

「心構えや高い意識を持つというのは、武術以外でもとても重要なことだ。武術であれ勉強であれ、その他のことであれ、向上心を持って取り組むのと義務感で取り組むのでは、付いてくる結果に雲泥の差が出るものだ」

「はい」

「お前が開発衛士と言う狭き門を目指すのであれば、人よりも優れた結果を示さねばならん。時にはお前より年上の人間に打ち勝つ必

要があるだろう。年上と言うだけで既にお前より多くの事を学び、経験しているのだ。時間では勝負にならん。ならば質でもって食らいついていけ。確固たる意思でもって他を凌駕しろ」

何やら最後の方には精神論も混ざったようにも聞こえたが、そこは都合のいいように解釈しつつ、助言をくれた父親に答える。

「父上の御助言、しかと心に刻ませていただきます」

「それと、教本の件だが、流石に最新型の物は無理だったが、激震のものであれば許可がおりた。それでも構わないな？」

「もちろん構いません。父上ありがとうございます」

「では、今夜にでも渡すから、そのつもりでいなさい」

今までの会話がはたして道中に交わすような会話なのかなと、諒は内心疑問に思いつつも、近衛は真面目な人が多いしそんなものかなと自分を納得させるのであった。そんなことを考えていると基地のゲートに付き、門番にセキュリティーカードの提示を求められる。

「おはようございます大佐。セキュリティーカードを提示していただいてもよろしいですか？」

「うむ、これだ」

「はい、確認致しました。お隣に居られるのは御子息で？」

「ああ、そうだ。これが、息子のカードだ」

「はっ、こちらも確認致しました。どうぞお通り下さい」

ゲートでの確認作業が終わり、二人は内に入っていく。そこで、父親からカードを渡される。

「これはお前のセキュリティーカードだ。今後一人で来ることもあるだろうし渡しておく。基地に入る際に門のところで提示しなさい」

「わかりました」

「失くすなよ」

ゲートから少し歩いた所で息子に問う。

「さて、道場まではもう一人でいけるな？」

「問題ありません」

「ならばよし。まあ、迷ったらその辺にいる者にさっき渡したカードを見せた上で道を尋ねなさい」

「はい父上、お仕事がんばってください」

「お前も鍛錬に励みなさい」

そういつて、二人はそれぞれの方向へ歩いてゆく。

——帝都・近衛軍基地内道場——

「ふっ、ふっ、ふっ」

風切り音と、呼吸音が混ざる。

胴着を汗に濡らしながらも、一心不乱に木刀を振っていると、

「精が出るな」

と声が掛けられる。木刀を振るのを止めて声の方を向くと、そこには同じく胴着を着込み木刀を携えた芳樹がいた。

「おはようございます、芳樹様」

「うむ、おはよう」

諒の気合いの入りに興味を持った芳樹は、何か目標があるから気合が入っているのでは、と思い問いかける。

「まだ二日目とは言え随分と気合いが入っておるな。何か目標でもあるのか？」

「目標はありますが、直接関係することかと言われれば何とも答え難いですね」

芳樹の想像した目標とは、誰かに勝てるようになりたい等の直接的な目標なのに対し、諒の目標とは開発衛士になるために、そして死なないために自らを鍛えるというものである。認識の齟齬に気がついた諒は、芳樹に自分の夢を語る。

「芳樹様、私は開発衛士になりたいのです」
「ほう」

芳樹は諒の言葉を面白そうに聞く。

「今年の8月に瑞鶴が米国産の戦術機に勝ったと言うのに触発されました」

どこか恥ずかしそうにそれを語る諒を見て、芳樹はどこか納得がいった様に頷きながら問う。

「なるほど。ならば此処で自らを鍛えるのは、衛士になるための準備ということか？」

「その通りです。父からも開発衛士は狭き門だと言われています。そのため今から出来ることを確実にこなし、力を付けようと思って

いるのです」

開発衛士になる難しさを理解した上で、目指したいと答える。また今朝の道中での話を芳樹に聞かせると、芳樹も頷きながら同意する。

「なるほど、確かにそんな話を聞かされた後では気合いが入るのも致し方が無い」

「はい。折角このような機会を得ることが出来たのですから、精一杯学び己が血肉としたいと思っています」

「うむ、言い心がけだ。私も見習わなくては」

二人は一層気合いを入れて鍛錬を再開するのであった。

――1987年 1月2日 帝都城――

征夷大將軍の新年を祝す言葉と共に始まった祝賀会は、武家以外にも帝国の要人らも多数参加していた。そして当然有力武家である深山家にもお声が掛り、近衛軍大佐である深山一臣とその息子二人も参加していた。

二男である諒が参加できたのには理由がある。当初一臣は長男である雅斗のみを連れて参加する予定であった。これは深山家を継ぐのは雅斗であるため、各武家や要人などと顔合わせをさせる為であ

った。しかし、諒が開発衛士になることを希望していることを知った芳樹が、道場に顔を出した一臣に直接諒を参加させるよう言ったのだ。曰く、

「会わせたい人物がいるので諒を正月の祝賀会に連れて来い」

と。流石に摂家の人間からの要望であった為に断り切れず諒を参加させることになったのだ。しかし一臣はどうしたものかと思っていた。

（さてはて、芳樹様直々の要望だったから諒を参加させたものの、あまり諒を挨拶に連れまわすと後々の後継問題に響きそうで怖いな。ただでさえ芳樹様という九条家の人間に気に入られているのだから下手をすれば深山家が割れかねん）

武家では例外はあるものの、昔から長男が当主になるという習慣が根付いている。しかし、習慣といってもそれは強制力を持たないものであり、摂家のしかも直系の人間が推したりすれば、推された人間が当主になる可能性が高い。当然分家なども上の人間の覚えの良い人物を後押しするであろうことは容易に想像出来る。そうなれば、党首候補として教育を受けてきた者が蹴落とされ、自由に振る舞ってきた方が当主になるという事態が発生し、兄弟間での潰し合いが起きかねない。最も、諒は当主の座などさっさと譲ってしまうだろうが。

（諒には悪いが芳樹様への挨拶が済んだら端の方で大人しくしてもらった方がいいだろうな。諒をここに連れてきたことで雅斗の機嫌も悪いことだし）

そう、雅斗は次期党首である自分を差し置いて摂家の人間と懇意

にしており、なおかつ両親に期待されている弟に嫉妬と僅かながらの憎悪を持っているのだった。

雅斗も一般的に見れば十二分に優秀な部類である。ただ、比較対象が悪すぎたというだけで……

諒の精神は大学院生なのである。大学院生と9歳児を比べる方がどうかしているのだが、そんなこと誰も知る由もないため、3歳も下の弟に負ける兄、という構図が出来てしまうのも致し方が無いことであった。

そんな父と兄の心情をなんとなく察した諒は、挨拶の人が途切れたすきを見て二人に言った。

「父上、私も個人的に御挨拶を申し上げたい方が居りまして、少々個人的に行動させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「おい、お前は何を言っているのだ？ そんな勝手許されるわけがないだろうに。そんなこともわからないのか？」

諒の発言に対して、雅斗は馬鹿を言うな、身の程を弁えろというような口調で返す。

そこへ、これを見かねた一臣が仲裁に入る。

「挨拶をしたい方と言うのは芳樹様かな？ それであれば纏まって行った方がいいだろう」

「確かに、芳樹様へ御挨拶に伺う予定もありますが、今は御忙しい様なので先に道場で御世話になっている方々へ御挨拶に伺おうかと思っています」

言外に上の人間の所には行かないから自由行動させると返すと、一臣もそれならと単独行動を許す。

「そうか。確かに今年も色々指導して頂くわけだし、良いだろう挨拶して来なさい。ただし、周りに迷惑を掛けるなよ」

「心得ております」

そう言っただけでいくつ諒の姿を不満そうに見ている雅斗へ声を掛ける。

「私達も挨拶回りを続けるぞ」

「はい父上。しかし良かったのですか？単独行動を許して」

「何、問題ないだろう。それに、私達の挨拶周りに付き合わせるにしても少しな……」

父親が言葉を濁す理由を自分なりに解釈したのか、雅斗は先ほどまでとは打って変わって上機嫌で父親と共に挨拶周りに行くのだった。

一方単独行動を許された諒は、

「明けましておめでとうございます。本年もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします」

「明けましておめでとう。今年も頑張っていこう」

「諒君、あけましておめでとう。今年から小学校に入学して大変になるかもしれないけど、指導の手は抜かないからね」

「まあ、あせらずにゆっくりやろう」

などと、道場の先輩方と和やかに歓談をしていた。するとそこへ芳樹が声を掛けてくる。

「明けましておめでとう、諸君」

「」「明けましておめでとうございます、芳樹様」「」

歓談していた全員で挨拶を返す。芳樹は軽く頷きながら言葉を続ける。

「3人は今年も指導の方よろしく頼む」

「畏まりました」

「非才ながら全力でお応えさせていただきます」

「未熟ではありますが、精一杯務めさせていただきます」

その場にいた先輩方は深々と頭を下げた。それを見ながら芳樹は諒へ声を掛ける。

「諒には今年中に私と打ち合えるようになってもらいたい」

「ご、御冗談を。まだ私は道場の門を叩いてから幾許も経っておりません。芳樹様のお相手など到底務まりません。平に御容赦下さい」

諒のあまりにも本気の対応に芳樹をはじめ先輩方が揃って苦笑する。そして芳樹が笑いを噛み殺しながら言う。

「なに、軽い冗談だ。本気にするな」

先輩方もそれに追随するように、

「そうだよ、諒君。いくら芳樹様の希望とは言っても、そんな無茶は私たちがさせないさ」

「そうそう、安心なさい」

「というか、もしそんな短期間で本当に芳樹様と打ち合えるように

なったら、我々の立場がないよ」

と苦笑交じりで答える。その言葉を聞いて明らかにホッとしている諒を見ながら、芳樹が本題を切り出すように声を掛ける。

「さて諒よ。今日呼んだ目的を果たしに行くとしようではないか」
「芳樹様、諒を態々呼んでまで果たしたい目的とは、いかな目的でしょうか？ お差し支えなければお伺いしてもよろしいですか？」

芳樹の言葉を聞いた先輩の一人が芳樹へ質問すると、頷きながら芳樹は答える。

「うむ、諒は将来開発衛士になりたいそうだな。此度の会には瑞鶴コンビも参加しておる故、いい機会だと思うてな」

「なるほど、確かに開発衛士を目指すのであればあの二人の話は為になりました」

先輩方も芳樹の話に納得したのか、頷きながら同意する。さらに先輩の一人が口を開く。

「確か、篁中佐の所にも諒君と同じぐらいの娘さんがいたはずだよ」
「ああ、確か唯衣ちゃんだったけ？ 篁中佐と巖谷少佐が溺愛しているって噂の」

先輩方の口から出てきた名前を諒は頭の中で探す。

（瑞鶴の開発主査と模擬戦時の衛士が篁中佐と巖谷少佐だったかな？）

そんなことを考えている諒へ芳樹は声を掛ける。

「では、そろそろ行こうぞ。諸君私たちはこの辺で失礼させてもらうよ。良い正月を」

「先輩方、失礼いたします。良いお正月を」

そう言って去ってゆく二人を見ながら残った3人は語る。

「やれやれ、諒君はすっかり芳樹様のお気に入りだな」

「まあ、いいじゃないの。微笑ましくて。芳樹様も弟が出来た様で楽しんでいるようだし」

「違うない」

3人はそのまま歓談を続けるのであった。

一方、芳樹と諒は、というと、8月に行われた模擬戦の話で盛り上がっていた。

「と言うことは、芳樹様は模擬戦当日ご覧になられていたのですね」

「うむ、我が国の戦術機が勝った瞬間は胸が空く思いだったぞ」

「私も生で拝見したかったですね」

そんなことを話しながら目的の人物たちを探していると、目的の人物を見つけた芳樹が声を掛けていった。

「失礼、少しよろしいかな。篁中佐、巖谷少佐」

「これは九条様、新年明けましておめでとうございます」

「うむ、明けましておめでとう」

「それで九条様、我々にどのような御用向きで？」

篁が芳樹と挨拶を交わしながら訪ねてきた用向きを聞く。確かに篁や巖谷は近衛軍の中佐と少佐ではあるが、家格は山吹であり、摂家の人間が声を掛けてくる理由が思いつかなかったからだ。それを感じとった芳樹は二人に声を掛けた目的を話す。

「お二人に声を掛けたのは、諒を紹介しようと思つてな」

芳樹の言葉を聞いた諒は二人に向かって自己紹介をする。

「新年明けましておめでとうございます篁中佐、巖谷少佐。お初にお目にかかります。私、深山家が二男諒と申します」

挨拶を聞いた二人は、諒の歳に似合わぬ挨拶に軽く驚きながらも挨拶を返す。

「明けましておめでとうございます。私は近衛軍で中佐をさせて頂いている篁と申します。そしてこれが」

「明けましておめでとうございます。深山様。私は近衛軍で少佐を務めさせて頂いている巖谷と申します」

うむうむ、と言う様に挨拶を交わしている3人を見ながら芳樹が本題を切り出していく。

「諒は将来開発衛士になりたいそうだな。お二人であれば何か為になる話でも聞けるのではないかと思つてな。私も昨年夏の模擬戦は見ていた故、興味がある」

「なるほど、そういうことでしたか。しかし深山様は九条様のお傍

付きで？」

九条家の人間が態々深山家の、しかも二男に世話を焼いている理由が今一理解出来ず尋ねてしまう。傍付きの人間であれば、それに理解出来る。最も傍付きの人間が開発衛士になるのを応援するというのに、疑問を感じずにはいられないが。

「いや、諒は道場の弟子だ。道場では私より年下の者はいない故、つつい構ってしまうのだ」

「九条様が通っておられる道場にその歳から通うとは、随分と早いですね」

「確かにそうであるな。しかし開発衛士は狭き門故、学べることは早い時期から、ということらしい」

4人で模擬戦の話や瑞鶴の話で盛り上がっていると、芳樹に声が掛る。

「御歓談中失礼いたします。芳樹様、御父上がお呼びでございます」
「ふむ、そうか。では申し訳ないが私は此処で失礼させて頂くよ」

芳樹はそう軽く断りを入れて、呼びに来た者と一緒に去って行った。それを見送った一同は歓談を再開するのであった。

「しかし、諒君はどうして開発衛士の道を？深山家なら近衛軍の大隊に配属されると思うけど」

「うむ、篁が言う様に赤を纏う者が開発現場に関わると言うのはかなり珍しい。上層部として口を出すことはあるが」

「確かに珍しいかもしれませんが」

やはり篁や巖谷も彼の父親が感じた疑問を持つのであった。それに対し諒は自分の思いを述べる。

「衛士の皆様を低く見るわけではありませんが、衛士一人に出来ることなど高が知れています。摂家の方々および帝国を守護する武家の人間として考えた時、一衛士として戦陣に立つより、開発衛士として開発に携わり、よりよい物を生みだすことに尽力した方が摂家の方々および帝国の為になると考えているからです」

そこまで深い考えを持っているとは流石に思っていなかったのか、二人は驚いた表情を見せる。それと同時に自分達開発衛士の思いを理解してくれていることに喜びと共感を抱いていた。

そんな3人に寄ってくる者がいた。

「とうさま、いわやのおじさま」

「お、唯依。友達との話は終わったのかい？」

「はい」

そう父親達に声を掛けながら寄って来たのは、篁家の長女唯依であった。どうやら先ほどまでは仲の良い者達と話をしていたようだった。すると諒の存在に気付いたのか、父親へ尋ねる。

「とうさま、このひとは？」

唯衣に尋ねられた篁が唯依に紹介しようとするのを、諒は制して自己紹介する。

「初めまして、私は深山諒といいます。歳は6歳です」

「は、はじめまして。わたしはたかむらゆい、4さいです」

父親のズボンの裾を掴みながら唯衣が自己紹介する。そんな唯衣の姿に苦笑しながら篁と巖谷が謝る。

「すまないね諒君。唯依に悪気はないんだ」

「唯依ちゃんは男の子に慣れていなくてな。許してやってほしい」

「いえ、構いませんよ。年上の異性に緊張するのは致し方が無いかと」

そんな大人2人の対応に、諒もまた苦笑しながら返すのであった。そうして、子供同士の挨拶も終わったところで諒は篁に質問を投げかける。

「ぶしつけない質問で申し訳ないのですが、篁中佐は開発衛士になるためにどの様な勉強をなさいましたか？」

「ふむ、開発衛士なるためにはまず衛士になる必要がある。その上で、アメリカに留学して色々勉強したよ。とは言っても、戦術機はとても広い分野の学問が複雑に組み合わされて成り立っているからね。全ての範囲を学べるのもじゃないよ」

戦術機は人一人でどうこう出来るものじゃないと篁は告げる。それを理解した上で諒は更に言葉を紡ぐ。

「はい、それは私も最近になって実感しているところです」

「実感？」

諒の歳で戦術機の複雑さを実感するという発言に篁は首をひねる。諒はそれを見ながら戦術機の教本で勉強を始めたことを告げる。

「実は父に無理を言って戦術機の整備教本を手に入れてもらったのです。それで勉強を進めていたのですが、本当に色々複雑でして……」

「おいおい、君はまだ6歳だろ？そもそも君ぐらいの年じゃ教本を呼んだところでほとんど理解できないんじゃない？」

「おいおい」

諒のとても発言に、篁だけではなく唯依の相手をしていた巖谷までもが驚きの声を上げる。諒は自分の異質さを認識しているつもりだったが、どうやらその認識は不十分だったことを2人の反応で思い知るのだった。一方の篁も深山家の二男の優秀さは噂としては知っていた。幼いながらも新聞の内容を理解し、父親と議論するのかなんとか……。最も実際は噂など足元にも及ばぬほどの優秀さだった訳だが。さて、篁が驚きから戻ってくると諒に告げる。

「んっん、まあ、戦術機の機構やシステムを学ぶなら確かに整備教本が一番だね」

「篁中佐にそう言って頂けるなら安心出来ます。正直手探り状態で勉強しているので、勉強方法が正しいのか確信が持てなかったのです」

篁が勉強方法に関しては正しいと言ってくれたことに安堵する。

そんな諒を見ながら篁は苦笑しながら言葉を掛ける。

「それはそうだろうね。というか君ぐらいの年頃で戦術機の勉強を始めて理解出来る時点で普通じゃないのだけだね」

「そもそも整備教本と言ってもハードとソフトどっちの勉強をするつもりだい？」

整備教本の分野とは大別すると、一般整備部門と戦術電子整備部

門となる。一般整備部門とは文字道理一般整備、パーツの交換や修理、オーバーホールを行う部門である。戦術電子整備部門は、戦術機の電子機器、システム関係を整備する部門だ。ちなみに前者がハード、後者がソフトである。諒は篁中佐の問いかけに、

「まずは、基本となるハードウェアに付いて勉強しています。ハードが分からないのにソフトが理解出来るとは思いませんから」
「そうだね、それがいいよ。というか、君は両方勉強するつもりなのか……」

諒がハードの次はソフトを学ぶと言ったことに、篁はもうどこか諦めた感じで答えるのだった。

そんな話をしていると挨拶周りが終わったのか、一臣が声を掛けてくる。その声に反応した篁と巖谷が敬礼し、挨拶する。

「諒、篁や巖谷と共にいたのか」

「これは大佐、御無沙汰しております」

「明けましておめでとうございます、大佐」

「明けましておめでとう、2人とも」

2人へ敬礼を介しながら挨拶を返すと、諒に向かって口を開く。

「諒、篁の娘さんと一緒に少し食事でもして来なさい。どうせほったらかしだったのだろうからな。篁、構わないな？」

「ええ、大丈夫ですよ。唯依、諒君と一緒に楽しんでください」

父親の席を外せという言葉を受けて、唯衣に話しかける。

「唯依ちゃん、何か食べに行こうか」

「は、はい」

唯依はいきなりの上に戸惑いながら諒に付いてその場を離れていくのだった。2人が離れていくのを見送った3人は話し出す。

「篁、巖谷、息子が迷惑を掛けたな」

「いえ、お気になさらないで下さい」

「ええ、軽く戦術機や開発衛士について話をしていただけです。から。篁が言う様に迷惑とは思っておりません」

「そう言ってもらえると助かるよ」

一臣はふうふう、と息を吐きながら感謝を示す。その様子に疑問を持ったのか巖谷が尋ねる。

「何やらお疲れの様子ですが、どうかしましたか？」

「いや何、諒のことで少しな」

篁と巖谷はその内容が分からずに顔を見合わせる。

「諒君のことですか？確かに6歳だと思えぬほど聡明だとは思いますが、特に問題になるようなことはなかったと思うのですが」

「そうですね、彼から歳不相応な印象は受けますが、礼を失したりするような性格には見えませんでした」

篁と巖谷は自分の所感を一臣に述べる。一臣もそれに頷きながら答える。

「うむ、その辺りの礼節に関しては外部の道場に行っているということもあって、あまり気にしていない」

「であれば、どのような？」

礼節や性格以外で頭を悩ませる事柄を思いつかなかったのか、2人は再び顔を見合わせ、一臣に尋ねる。

「大佐、差し支えなければお尋ねしても？」

「う……む」

一臣は大きく息を吐いてから気を取り直し2人に語る。

「私が悩んでいるのは後継問題についてだよ」

「後継問題ですか？確か大佐には雅斗君という長男が居られたと記憶していますか」

一臣の悩みが後継問題だと聞き、長男がいるはずだと確認する。

「ああ、そうだ。私も深山家は長男に継がせるつもりだ。親鼯肩に見てもこのまま成長すれば家を継ぐには問題ないと思っている」

「ではなぜ？」

巖谷が疑問を問うた後、篁が思い至ったのか自身の予想を述べる。

「優秀すぎる弟ですか？」

一臣はそれに頷きながら苦々しく返答する。

「ああ、ただ優秀なだけであればよかったのだが、芳樹様に気に入られておるし。その他道場に着ている者達の覚えもいいとなれば、流石にな……」

「確かにそれは……」

それは深山家とは形は違えども、篁も後継問題に頭を悩ましていたからこそその理解だった。一粒種の唯依が女兒ということもあって、分家筋からは後継のために後妻を迎えろ、あるいは分家の男兒から許嫁をとという声が上がってきている。今現在御家騒動という程大事にはなっていないが、後継問題で少々本家と分家筋との間に溝があるのであった。一臣もそのことに思い至ったのか、篁に対し、

「何なら、いつそ諒をやろうか？」

「は？ いえいえ！ 何を唐突に。唯依はまだ4歳ですよ、その様な話には早すぎます」

一臣のいきなりの提案に篁は驚き、手を振りながら唯依の年齢を挙げて断るのだった

「ふむ、そうか？ まあ、本人達次第ではあるが、家格的にも年齢的にも問題ないと思ったのだがな」

一臣としては諒が篁家婿入りすれば後継問題が片付くし、開発衛士である篁から学ぶこともできる。また篁家側にしても、二男ではあるが家格が上である深山直系との許嫁なら、分家を黙らせるには良い材料だと思つての提案であつた。

「有難いお話ではあるのですが、自分といたしましては娘の気持ち大切にしたいと思つていました」

「まあ、そうだな。私もそれには同感だ。本人たちの意思を尊重するべきだな」

「恐縮です」

そんなやりとりを見ていた巖谷の内心は

——唯依ちゃんを他の男にやれるか！

と、烈火の如き様相であった。

一方、親達がそんなことを話している等露も知らぬ子供2人組はというと、供された料理に舌鼓を打ちながら話をしていた。

「唯依ちゃんこれおいしいね」

「そうですね、りょうさま」

「えっと、様付けはやめてくれないかな？」

「ならなんておよびすれば？」

歳下の子に様付けされることに抵抗があったのか、唯依に呼び方を変えるように提案するが、逆に何と呼べばいいか問われてしまう。

「え？ うーん、そうだな。諒って呼び捨てでいいよ」

「え！？ だめです！ りょうさまは、わたしよりもえらいんですから！」

諒としては歳も近いのだしそこまで畏まった呼び方をしてほしくない、という思いからの提案であったが、慌てた様に家格を持ち出した唯依に、答えに窮してしまう。そして、せめてもの妥協案を言う。

「偉いって。まあ、確かに家格は上だけど……ならさ、君付けで勘弁してくれないかな？」

「えっと、でもやっぱり……」

「ふう、そのうち様付けは止めてくれると嬉しいかな」

唯依が承諾を渋るのを見て諒は諦める。唯依はそれを確認してから先ほど自分の父親からどのような話をしていたのかと問いかける。

「りょうさまはどうさまと、どのようなはなしをしていたのですか？」

「篁中佐や巖谷少佐の開発した瑞鶴や開発衛士について話をしていたんだよ」

諒が態々話をしに来た理由が、唯依の尊敬する父親達の誇るべき功績だと言うのを聞いて唯依は内心舞い上がっていた。

——やっぱり父様と巖谷の叔父様は凄い、と

そんな、唯依の内心を汲み取ったのかどうかは、分からないが諒は自分が篁達の様な開発衛士になりたいと語る。

「私は将来篁中佐や巖谷少佐の様な開発衛士になりたいくて、今日は話を聞かせて頂いたんだ」

唯依は人々に称賛される父親達の背中を見て育ったために、元々内にその様な思いがあったのだろうが、諒に触発され自分も父達の様になってみせると宣言する。

「わ、わたしもとうさまや、いわやのおじさまみたいに、りっぱなせんじゅつきをつくります！」

話が終わり、2人を呼びに来ていた大人達は唯依の宣言を聞いて、

「篁、お前の娘は既にお前の後を継ぐ気のようにだな」

「ええ。しかし、子供が自分の後を継いでくれるというのはうれし

いものですね」

「唯依ちゃん、立派になって」

一臣はどこか微笑ましそうに。篁は擦ったそうにしながらも喜びを表し。巖谷は唯衣の成長に感動していた。

「諒。どうやら将来に手強いライバルが出来てしまった様だな」

近くに寄って行った一臣が諒へ軽く言葉を放つと、諒もそれに倣って言葉を返す。

「ええ父上。どうやらその様です」

「そ、そんなライバルだなんて！」

唯依は自分と諒が競い合うなんて恐れ多いと慌てて否定する。そんな唯依に苦笑しながら、息子と今後も仲良くしてくれと声を掛ける。

「唯依ちゃん、よかったら今後も息子と良くしてやってくれ。お互い開発衛士を目指す者同士良い励みになるだろう」

「は、はい」

一臣は唯依が頷いたのを見てから篁達に向き直り、そろそろ辞すことを告げる。

「私達はこの辺で失礼させて頂くよ。3人ともよい正月を」

「失礼させて頂きます篁中佐、巖谷少佐。またね唯依ちゃん」

「大佐達も良い正月をお過ごしください」

「また、おあいしましうりようさま」

そう言って2人はその場を離れた。残された3人は先ほどの話をしていた。

「唯依、私の後を継いでくれると言ってくれてありがとう。うれしかったよ」

篁は笑みを浮かべながら誇らしげに娘の頭を撫でる。唯依も擦ったように、でも嬉しそうにそれを受け入れる。

「おい、篁ずるいぞ。俺にも代われ」

巖谷はおいしい所が取られたのが不満なのか、唯依の頭を撫でるのを代われと要求するが、篁に一蹴される。

「こればかりは父親の特権だから譲れないな」

篁の返しに言い返そうとしたが、唯依が嬉しそうにしている為に、それを諦めざるを得ず、周囲から注がれる視線を無視してルルルと、悔し涙を流して嘆く巖谷の姿がそこにはあった。

篁や巖谷が親馬鹿っぷりを見せている頃、一臣は諒へ篁達と知遇を得たことを雅斗へ黙っているように言い含める。

「お前のことだ、態々言う事もないかもしれんが、篁達に会ったことを雅斗に言うなよ」

「承知しています父上。私も態々面倒事を引き起こすつもりはありません」

篁達の事が雅斗に知られると面倒事になりかねないことを理解し

ている諒はそう返すのだった。

こうして各々の思いを胸に祝賀会は終わった。

Phase 01 (後書き)

自分の表現力、語彙の無さに絶望しかけてます。

また、文章の区切り方とかわからない……

もっと精進します。

感想・御指摘は随時受け付けてます。

Phase 02 (前書き)

主人公の口調が安定していない気がする……

メカ本やWIKIを見て妄想しながら話を書くのは楽しいですね。

Phase 02

——1987年 3月13日 帝都・篁家——

月が地面を照らし始めた頃、少女を主賓としたささやかな祝いの宴が行われようとしていた。普段仕事に忙殺されて滅多に食事を共にするどころか、家に帰る事も出来ない篁と巖谷の2人も、この日はばかりは全力で仕事を片付けて急いで帰って来たのであった。

「誕生日おめでとう唯依」

「唯依ちゃん誕生日おめでとう」

「ありがとうございます。とうさま、いわやのおじさま」

本来であれば篁家の長子である唯依の誕生日ということだけで一族で集まり祝うのだが、分家連中に余計なことはさせまいと、篁が断りを入れたためにささやかな宴になったのだった。最も祝われる当人にしてみれば敬愛する父親達がいるだけで満足しており、むしろ一族の人間がいない為、妙に気を張らなくて済む分心が軽く、浮かべる笑顔も明るくなっていた。

食卓の上には普段より幾分豪勢な和食とバースデーケーキが乗せられていた。和食にケーキという組み合わせはミスマッチなものだが、親しき者での宴の為特に気にされていなかった。唯依が主賓の席なのでジュースで乾杯した後、巖谷が感慨深そうに呟いた。

「唯依ちゃんもこれで5歳。来年には小学校に入るのか。早いもんだ」

「おいおい、もう来年の話か。少し気が早すぎるだろ」

巖谷が既に来年の事に意識を飛ばしているのを、篁は苦笑しながら諫める。

「馬鹿野郎、唯依ちゃんに似合うランドセルを探して注文するんだ、今から考えなきゃ間に合わん！」

「おい巖谷、俺の楽しみを奪うな」

親馬鹿2人の掛け合いをどこか困ったような表情で見ていた唯依に気付いたのか、2人は場の雰囲気を変える為にプレゼントを渡すのであった。

「んっん、まだプレゼントを渡してなかったな。はい唯依、これは私からのプレゼントだ」

「ありがとうございます。とうさま」

篁は咳ばらいをしながら、唯依に化粧箱に納められた刺繍の施されたハンカチを渡す。

「キレイ……。だいじにつかわせていただきます」

手渡されたハンカチの見事な刺繍に心奪われている唯依を見て、満足そうな笑みが篁の面に浮かぶ。

「うん、そうしてくれるとうれしいかな」

唯依の反応に安堵しながら篁が答えていると、

「唯依ちゃん、俺からはこれだ」

巖谷が次は自分の番だ、と言わんばかりに帯地で作られたバッグを渡す。これも気に入ったのか唯依は目を輝かせながら手に取る。

「わあ、ありがとうございます。いわやのおじさま」

その見事なバックを見て篁が巖谷に尋ねる。

「おい巖谷、良いのかこんなもの貰って？」

「別に構わんさ」

「そうか、悪いな」

2人がプレゼントを渡し終わり、食事も粗方終えたところへ女中が襖の向こうから声を掛ける。

「失礼いたします。旦那様、深山様よりお嬢様宛てにお荷物が届いております」

「深山から唯依へ？取りあえず持って来てくれるかな？」

「失礼致します」

深山から唯依へ物が届いた事に驚きながら、それを持って来て貰う。そして差出人を確認すると、それは諒であった。

「唯依、諒君から誕生日プレゼントみたいだよ」

「え？」

唯依は思いもしない人物からのプレゼントとあり、驚きの表情を浮かべる。同時に巖谷も驚く。

「諒君って、正月にあった大佐の息子さんだよな？」

「ああ、そうだな」

「あの歳でプレゼントを贈るとは……。唯依ちゃん取りあえず開けて見たらどうだ？」

巖谷は6歳児でありながら唯依の誕生日を確りと覚えており、その上プレゼントを送ってきた諒に慥然としながら、唯依に中を見る様促す。

「あつ、はい。そうですね」

唯依が巖谷の声に戸惑いながら、包装を解いていくと中には薄紫色の花と小さな箱が入っていた。

「おはなとはこ？」

「そっちの箱の方はオルゴールじゃないかな？」

「ほう、中々いい趣味してるな」

「へえ、この曲は<星に願いを>だね。それにしても、その花は何の花だろう？」

プレゼントの一つであるオルゴールに関心しながらも、男連中は花に詳しくなく、唯依も幼い為分からず首をかしげていると、料理を下げに來た女中が3人に声を掛ける。

「皆様どうなさいました？」

「いや、唯依にプレゼントとして花が贈られてきたんだけど、何の花かわからなくてね」

「拝見させて頂いてもよろしいですか？」

「ああ、構わないよ」

「では、失礼して」

笹は女中であれば自分達よりは詳しいだろうと花を見せると、女

中はあらあらという様に3人に花の名を告げる。

「これは碇草ですね」

「碇草？」

「はい、お嬢様の誕生花になります」

「なるほど。唯依の誕生花か。諒君もなかなかやるなあ」

「しかし……」

篁が花まで添えてプレゼントした諒に関心していると、女中が何やら考え込んでいるのに気づき声を掛ける。

「どうした？」

「旦那様、失礼ながら、この花の送り主はお嬢様と何か特別な御関係なのでしうか？」

「ん？ どういう意味だ？」

「碇草の花言葉はくあなたをとらえる＞でして。異性にこの花を贈ったとすると、告白の様な意味にも取れますので。最もこれは私の深読みなのかもしれませんが」

女中が碇草の花言葉の意味を告げると、それを聞いた3人の反応は三者三様であった。

「こ、こくはく……りようさまが……アウアウ」

「あっの餓鬼！」

「諒君、流石にそこまで考えてない……よ……ね？」

唯依の顔は告白という言葉でトマトの様に真っ赤に染まり、巖谷の顔は怒りで真っ赤に染まり、篁は困惑した表情を浮かべた。諒はただ花屋で誕生花を注文しただけなのだが、そんなことを知る由もない3人はこの花言葉の意味を深読みしてしまった。

篁は落ち着きを取り戻して真っ赤に顔を染めた唯依を見ると、

（この前会ったばかりだけど案外唯依も満更じゃないのかな？）

等と、正月に深山から提案された許嫁の件を考えるのだった。

こうして唯依の誕生会は混沌としたまま終わっていった。

——1994年 7月初頭 アメリカ ケンブリッジ市内 とあるマンション——

「やれやれ、これで此処ともお別れか。長かった様な短かった様な……」

諒がぼんやりと今までの事を振り返っていると、ドアの向こうから声が掛けられる。

「諒様、出立の準備は終わりましたか？」

「ああ、丁度今終わったところだ」

「それでしたら、リビングにいらして下さい。軽食を用意しましたので」

「わかった、すぐ行く」

諒はそう答えてからもう一度部屋をぐるりと見まわし、リビングに向かっていった。

この7月をもって深山諒はアメリカ留学を終え日本に戻ることで、今日はその出発日であった。

ことの始まりは約7年前にまで遡る。

——1987年 4月 帝都・帝国第一小学校——

（暇すぎる……）

教師の声だけが響く教室の中で諒はそんなことを思っていた。今は算数の時間なのだが、大学院生であった諒にとって算数はおろか小学校の範囲で習うことなど無いに等しい。習うにしても宇宙開発やBETA等によって以前の知識と異なる近代史ぐらいである。そんな訳で今後の事を考えてみる。

（いつそアメリカで飛び級しながら戦術機の勉強した方が為になるな。でも流石にアメリカ留学を許可されるとは思えないが……。ダメ元でお願いしてみるか？先に母上を味方に付けてから父上を説得すればあるいは……）

そんなことを考えていると、授業内容が理解出来ずに悩んでいるのかと教師から声が掛けられる。

「深山君、何処か分かりませんでしたか？」

「いえ、大丈夫です」

「なら今黒板に書いてある問題を解いてもらってもいいかしら？」
「わかりました」

そう言って諒は席を立ち、

（やれやれ、考え事するにもばれないようにしないと面倒だな）

と考えながら黒板に向かって行くのだった。

週末、深山邸当主部屋では親子による話し合いが行われていた。

「それで諒、今度は何のお願いだ？」

一臣は諒から明日の夜に相談があるから時間を取ってくれと言われており、前同様また何かお願いがあるのだろうと考えていた。諒はやれやれといった風の父親を見ながら留学の話を切り出す。

「父上。アメリカに留学させて下さい」

「は？留学？お前がか？」

「はい」

諒のあまりの話に流石の一臣も呆けてしまう。そして、深呼吸して落ち着きを取り戻してから何を言っているのかと問う。

「お前は何を言っているか分かっているのか？と言うか何故留学する必要があるのだ？こう言っては何だがお前がお前が通っている小学校は設備、教師の質共に帝都ではトップクラスの所だぞ」

諒は父親をどの様に説き伏せようかと考えていたが。いつそのことと小学校はおろか高校までの範囲で学ぶことがないことを伝えることにした。

「父上、正直に話しますので、まずは私の話を聞いてください」
「よかろう、話してみなさい」

一臣は取りあえず諒の言い分を聞いてから判断しようと諒に話をさせるのであった。

「小学校・中学校および高校で習う範囲の勉強を私は既に習得済みだということが理由です」

「な！」

一臣は流石に目を見開いて驚く。諒はそんな父親を無視して話を続ける。

「ちなみに母上立会いの下テストを行ったのでこの話は事実です。そのことを踏まえると、これから高校卒業まで約12年間、あるいは高等学校卒業程度認定試験の受験年齢である満16歳までの約10年間を日本の学校で過ごすのは、はっきり言って無駄だと考えたからの留学です。残念ながら日本には飛び級制度がありませんので、そうなる海外に行く他ありません。また、アメリカの他にイギリスも考えてはいたのですが、こと戦術機の事となればアメリカが最先端を行っていると考えて、まず間違いありません。ならば最初からアメリカに留学した方が良いと考えました。確かに武術の」

諒は母親の名を出し嘘でないことも告げ、その上でつらつとアメリカ留学の理由を述べていく。そんな諒に一臣はストップを掛ける。

「待て待て。ふう、一先ず確認だ。高校までの範囲をお前は既に理解しているのだな？」

「はい、先ほども申しましたが、母上立会いの下テストを行いました

たので母上に確認して頂ければよろしいかと」

「要するに、お前は飛び級制度を使って時間を有効に使って勉強したいと」

「はい、その通りです」

「あやめはそのことを知っているのか？」

「はい、その上で父上の判断に任せると」

母親であるあやめは留学の話を知っているのかと尋ねると、既に知っていてその上で一臣に判断を任せると言われる。留学そのものに対する理解は得られたが、行き先がアメリカだということに抵抗を持たれてしまった。

「留学先がアメリカか……」

「お願いします父上。以前アメリカに留学した篁中佐にもお話を伺ったのですが、残念ながら未だにアメリカの方が戦術機に関しては進んでおり、向こうで学ぶことも多いだろうとおっしゃっていました」

「篁が…そうか……」

それを聞いて一臣はますます考え込んでしまった。そうして暫くの間互いに口を開かなかった。そうして数分経った頃一臣が顔を上げて口を開く。

「武術に関してはどうするつもりだ？ お前はまだ習い始めたばかりで単独で鍛錬出来るほど覚えてはいないだろう」

以前、鍛えてくれというから道場に連れて行ったのにそれはどうするつもりだ、と問う。

「今通っている道場には正直に理由を話した上で辞させてもらいま

す。また、向こうでの鍛錬はアメリカに同行して頂く方から教えを受けたいと考えています」

「はあ、そこまで考えているのか……」

一臣は諒が先の事も十分に見越した上で提案してきたことに呆れていた。流石に一臣もこの話を即答することは出来なかった。

「ふう、取りあえずあやめとも話し合ってみるから今日の所は保留だ」

「わかりました。ですが可能な限り早めに決めて頂けると助かります」

「わかっている。そう長くはかからんだろう」

取りあえず妻と話し合ってみるからと一臣は逃げる。その上で諒に問いかける。

「お前は何を焦っている？」

「……確かに焦っているかもしれませんがね。今の人類の状況を鑑みれば、日本までそう遠くないうちに戦火が広がってくるでしょう」

「お前……」

「そうなってしまえば勉強等と言っている場合ではありません。また、戦火が広がってくるのであれば、それを止める為の術を考えるべきでしょう。その為にも私は少しでも早く、そして多くの事を学びたいのです」

「お前今の状況をどうやって知った？情報規制が掛っているはずだが？」

諒の言った言葉に一臣の顔が引き締まる。

「新聞や人伝に聞いてです。まず、人類が優勢なら徴兵制等復活さ

せないでしょう。2つ目に昨年創設された帝国本土防衛軍です。もし日本が戦場にならないのであれば本土防衛軍という軍名は些かおかしい。つまり、長期的に見れば日本は戦場になる可能性がある、あるいは日本近郊まで戦線が下がると軍が判断したと私は推察しました」

「そうか……」

一臣は諒が新聞等から推察した事がほとんど合っている事に舌を巻いていた。事実昨年には統一中華戦線が誕生しているし、今年に入ってから欧州各国では英国やグリーンランドへの避難が始まっている。

諒は考え込んでしまった父親を見て今夜は引こうと思ひ、

「父上、私はこれで失礼します。おやすみなさいませ」

立ち上がり部屋を出ようとした時、一臣から声が掛る。

「お前の留学を認めよう」

諒は驚いて振り替える。それを見ながら一臣は言葉を続ける。

「お前の言うとおりに、日本を取り巻く状況は芳しくない。今を逃せば留学は叶わないというお前の考えは正しいだろう」

「父上……」

「また、父親として子供の才能を潰す様な真似をしたくない」
「……」

一臣は絞り出すように言葉を発する。

「だから……留学を認める」

「っ……」

諒はただ黙って頭を下げ、そして部屋を辞した。

こうして慌ただしくも準備が始まり、全ての準備が終わったのが5月中旬だった。

——1987年 5月 成田国際空港——

「諒、体に気を付けてな」

「はい父上」

「体に気を付けるのよ。後何かあったらすぐに秋月さんに相談するのよ。それから長期休暇には必ず戻ってくるのですよ。それから…」

普段気丈に振る舞っているあやめだが、流石にまだ幼い息子が国外に留学するとあって心配そうに問いかけていた。それを見かねた一臣はあやめの肩に手を載せて諭す。

「その辺にしておきなさい。秋月、諒の事頼んだぞ」

「畏まりました」

秋月は深山分家の人間の中でも一臣の信頼が厚く、諒の留学に際して身元保証人兼剣術の指導者として選ばれたのだった。

「そろそろ時間ですので、行ってまいります」

「それでは失礼致します」

2人はそう挨拶してカウンターの方へ歩いて行った。

「本当は行かせたくなかったんじゃないのか？」

「それはそうですよ。いくらあの子の為とは言っても、まだ6歳なんですよ」

「だがまあ、秋月もいることだし大丈夫だろう」

「何事もなく戻って来て欲しいわ」

見送る側の2人はそんな話をしながら諒達の姿が見えなくなるまでその場で見送るのだった。

——同日 技術廠第壱開発局——

「そーいやあの餓鬼は今日出発だったか」

「あの餓鬼って諒君のことか？確か今日の昼の便で発つって聞いているよ」

巖谷がポツリと呟いた言葉を聞いた篁がそれにこたえる。また、諒の事を餓鬼と呼ぶ巖谷を注意する。

「それと巖谷、諒君を餓鬼って呼ぶのはまずいぞ。もし他の人間の耳に入ったら面倒だぞ」

「わかってるさ。だが、唯依ちゃんの誕生日に告白まがいの事をする様な奴だ、気に入らん」

篁の注意に不満そうに巖谷は返す。巖谷は唯依の誕生日に贈られた花の件が気に入らないようである。事実あれ以来唯依は諒の事を

何処となく意識しており、唯依の事を溺愛している巖谷からしてみれば面白くない。巖谷は篁にお前はどうかんだと問う。

「そういう篁こそどう思ってるんだ？」

「私か？確かにまだ早いとは思うけど、唯依が諒君を好いたとしても別に反対はしないつもりだよ」

「何？本気か？」

篁の返答に巖谷は意外そうに答える。篁もその反応に苦笑しながら理由を話す。

「ああ、本当だ。切欠はどうであれその思いが本物なら別に構わないさ。それに私も諒君の事は気に入っているしね」

「確かに出来た餓鬼ではあるがな」

ふんっ、と鼻を鳴らしながら答える。そんな巖谷を見ながら篁はもう一つの理由も告げる。

「それに利用するみたいで悪いけど、諒君と親しいというのは分家連中への良い牽制にもなるからね」

「それに、巖谷も何だかんだ気に入ってるんだろう？」

篁の切り返しに顔を顰めながら答える。

「ああそうだよ。気に入ってるよ。将来有望そうだし、俺達の仕事への理解もある。なおかつ上の人間らしからぬ所も、ああ気についているさ。だから気に食わん」

巖谷は諒の事を気に入っている事を認めた上で、唯依を取られるのが気に入らないと告げる。篁は呆れながら言う。

「娘を取られる父親は俺なんだがなあ……」

「唯依ちゃんは今俺にとっても娘同然だ」

2人は親馬鹿を発揮しながらも仕事を続ける。そして、篁が呟く。

「しかし、本当に留学するとはな。しかもあの歳で」

「ああ。最も6歳で留学しても意味がない様にも思うがな」

6歳で留学したところで軍や開発企業に行ける訳ではないので留学する意味が薄いと感じた巖谷が述べると、篁は諒から聞いた事をそのまま伝える。

「諒君は高校で習う範囲の勉強を既に習得しているらしい」

「は？ いや、ありえんだろ。いくらなんでも」

巖谷は篁の発言に作業の手を止めて篁を見る。篁は巖谷の反応に当然だともいうかの様に頷きながら言う。

「まあ、そう思うよな。でも本当らしい。そんな訳で飛び級制度のあるアメリカへ早々に留学を決めたらしい」

「何でもありだな」

「俺もそう思うよ。以前大佐に会った時に大佐も、家に息子はどんなってんだって言ってたよ」

篁は以前アメリカ留学について聞きに来た一臣の事を思い出し、苦笑しながら答える。巖谷はそれを聞きながら諒の今後について思いを巡らす。

「しかし、向こうで飛び級して勉強するとなると、戦術機の勉強と

いうよりは工学の勉強をするつもりなのか？」

巖谷の考えを篁は肯定しながら諒が述べた希望を伝える。

「そうみたいだよ。基礎となる工学関係の勉強をした上で戦術機の勉強をしたいって言ってたし。何でも1年以内に高校を卒業し、MIT入学を狙うらしい」

「1年で高校卒業って……尋常じゃないな。そもそも仮に1年で高校卒業出来たとしてもMITに入るのは容易なことじゃないと思うがな」

諒の考えている進級のペースが異常なほど早い事に呆れる。そして、諒が入学を希望している「マサチューセッツ工科大学《MIT》はBETA大戦以前は世界的にもトップクラスの大学として名を馳せた名門大学であり、いくら諒が優れているとは言っても入学は容易なことではないと告げる。

「それは俺も言ったよ。そしたら本人もそれは自覚してるみたいで、向こうの大学は単純な学力だけで選考する訳じゃないって言ってた」「ほう」

巖谷は篁の言葉を聞いて興味深げに聞き返す。

「なら、どんな選考なんだ？」

「諒君が言うには、小論文や面接以外にも交渉次第では色々なテストが受けられるらしいし、俗な話お金を払えばある程度基準が下がるとか色々有るみたいだ」

「6歳で金を使うか……早熟なのも良し悪しってとこだな」

「利用出来る物は何でも利用するっていう心構えは良い事なのかもしれないが、流石に少しな……」

2人は6歳児なのにも関わらず世の中の裏側を少しばかり理解してしまっている諒に同情した。

――1994年 8月 成田国際空港到着ロビー――

「んっん、やっと着いたな」

「そうですね。取りあえず荷物を受け取りましょうか。外には迎えが来ている筈です」

「ああ、そうだな」

飛行機からそんな事を言いながら降りてきた内の1人は少年で、それに答えながら降りてきたのは30代後半の男性だった。そして入国ゲートに向かって話をしながら歩いて行く。

「諒様は今後の予定は決まっておいですか？」

「取りあえず家に帰って挨拶だな。その後で九条家や篁家へ挨拶に伺う予定だ。それが終わったら直ぐに訓練校に入学だな」

「いくら法改正で徴兵年齢が下がったとは言え早すぎではないですか？日本に戻ってきてから言うのも何ですが」

今年の初めに徴兵年齢の引き下げが決定し、後方任務限定ながら学徒志願兵の兵役が可能になった。そのため諒はセメスター終了までに卒業に必要な単位を取得した上で適正試験を合格し、論文研究を始められる段階にしてから休学手続きを申請した。そして日本に戻ってから独自に研究を行い、それによって学位を得ようと考えて日本に帰って来たのであった。

「今更だな秋月。それに向こうでの勉強も魅力的ではあるけど、私の目的は開発衛士になることであって、目的と手段を間違っていない」

「軍属になれば戦術機にも触れられる。机の上で理論を考えたり、数式を弄るのも大事だけど、実際に戦術機に触れて、現場に立たないとわからない事も多いと聞く。私が言うのもおかしいけれど、経験が理論を上回る事もあるし、世の中ロジックだけじゃないからな」

「それに専門的に工学知識を修めた衛士なら開発衛士になりやすいだろうしな」

「はあ、諒様に口で挑むのは止めておきます」

秋月は諒に何を言っても無駄だと悟り話題を変えた。

「そう言えば筆家へ挨拶に伺うと仰っていましたが、確か娘さんとも仲が良かったですよね？」

「そうだな。唯依とは6歳の時からの付き合いだから、幼馴染と言えなくもないかな？ 最も知り合ってから期間が長いだけで実際に顔を合わせていた時間はかなり短いけどな」

「でも確か毎年プレゼントを贈っていましたよね？ 珍しい事に」

毎年唯依へプレゼントを送っておきながら、単に付き合いが長いだけではないだろうと匂わせる。そんな秋月に苦笑しながら答える。

「まあ、確かに少しは……な。ただ、芳樹様をはじめ、かつて通っていた道場の先輩方には好意的に接して頂いているけれども、私自身武家の中では異端と言ってもいい程だからな。異端児に態々近づいてくる人はそうはいないだろう？ まあ、そんな訳で今ある繋がり大切にしたいというのもあってな」

諒は自身が武家の人間として型破りな事をしている自覚はあった。6歳という歳で日本を離れ、かつての敵国アメリカに渡り勉強する。それは悪意に解釈すれば、日本の教育を否定し、技術力が劣っているといわんばかりの行動であり、下手をすれば武家の人間から爪弾きにされても仕方がないと思っていた。実際そこまでひどくなくとも、規律や慣習を大事にする武家の人間の中で浮いているのは事実であった。それ故留学以前からの知り合いであり、幼馴染とも言える唯依には単なる知り合い以上として接していた。

「それですか……。あっこれ諒様の荷物ですね」

「ありがとうございます。さて、これで荷物も受け取ったし外に出るとしようか」

「そうですね」

2人はコンベアーから荷物を取り、エントランスロビーの方へ歩いて行く。

「しかし長期休暇には戻って来ていたとは言え、こうして日本の地を踏むと帰って来たという感情が湧いてくるものだな」

「それはそうですよ。諒様は6歳で渡米した訳ですから、人生の半分はアメリカで過ごしているんですよ。感慨の一つも湧いてきますよ」

諒が感慨に浸っていると秋月が苦笑しながら答えた。そしてエントランスロビーで迎えの人間を探していると声が掛けられる。

「お帰りなさいませ諒様、秋月様。御荷物をお預かり致します」

諒と秋月を待っていたのは深山家の運転手だった。諒は彼に手荷物を渡し、3人はエントランスロビーを後にする。少し歩いてロー

タリ―近くになると此処で少し待つように言われる。

「車を回してきますので少々お待ち下さい」

「わかりました」

運転手はそう言って足早に車を取りに行った。

「しかし、7年もアメリカに居たせいか、こう感覚が狂うな」

「そうですね。周りが日本人ばかりだというのは、以前なら当たり前の光景だったはずなのですが」

「話してるのも日本語だしな」

「はい。しかし長らく向こうに居たせいで英語がうまくなりましたよ。今後使うかわかりませんが」

諒と秋月はたわいもない事を話しながら待っていると、車を回してきた運転手から声が掛けられる。

「お待たせ致しました。それでは荷物を積みますのでお預かり致します。御二方はどうぞ車内へお入り下さい」

「それでは願います」

「ではこれです」

2人はそう言って荷物を渡すと車内へ入っていく。

「ふう、涼しいな」

「今は夏ですからね。アメリカに比べて湿度も高いですから久々の体には堪えますね」

「ああ。こんなところまで向こうに染まったんだと思うと苦笑しか出てこないよ」

2人が車内で涼んでいると荷物を積み終わった運転手が運転席に付き、声を掛けてくる。

「それでは、出発致します。本日はこのまま深山本宅へと向かわせて頂きます」

「ええ、お願いします」

こうして、3人が乗った車は成田空港を出発し帝都へ向かって行くのだった。

——同日 帝都・深山邸——

その日の夕餉は諒の帰国を祝ったささやかな宴が行われていた。宴と言っても久々の親子の団欒を邪魔するという不粋な輩はおらず、家族のみでの本当にささやかなものであった。乾杯がなされ、宴が始まるとあやめが早々に声を掛ける。

「諒向こうでの暮らしはどうでしたか？」

「充実していましたよ。もっともやったことと言えば勉強と鍛錬が主で、後は付き合いで軽く出かける程度でしたね」

あやめの質問に苦笑しながら答える。諒も高校卒業までは問題なく進めたのだが、流石にMITの壁は中々に高く、鍛錬食事睡眠以外は全て勉強していた事を告げる。そんな諒の答えに苦笑しながら一臣は頷く。

「遊びに行った訳ではないのだから、それは仕方がないだろう。と

は言えよくもまあ本当にMITを卒業出来たものだな」

いくら入学金や寄付金等を通常より多く払いハードルを下げたとはいえ、BETA大戦前は世界最高峰の一角に数えられた大学に飛び級で入学、そして卒業、博士課程の単位まで履修したのだから尋常な努力ではない。ちなみにアメリカの大学は日本の大学と違い入学するよりも卒業する方が難しい。

「それと、MIT入学の際随分と援助して頂いてありがとうございました」

諒は両親へ金銭的負担を強いた事を詫びる。そんな諒へ2人は笑って返す。

「そう思うなら、今後の活躍でその分を取り戻しなさい」

「子供がお金の事を心配するものではありません。それに子供の才能を伸ばしてやるのが親の務めですからね」

諒は2人へ頭を下げる。

そんな諒へ一臣は今後の予定を聞く。

「お前は今後どうするつもりなのだ？聞いた話だと研究を行わないで戻って来たようだが」

「まず九条家と筆家、それと以前通わせて頂いた道場へ挨拶に伺う予定です。その後訓練校へ入学するつもりです。研究に関してですが進められるものは独自に進め、今後もし技術廠へ出向出来ればそこで研究を行い、論文を作成し学会に提出するつもりです。MITでの必要単位は既に取得済みですので、論文審査さえ通れば学位は得られます」

「随分先まで見込んでいるな。それにこう言うては何だが、研究の

第一線を離れると色々不利になるのではないか？」

一臣は諒が2年間研究から離れることで不利になるのではないかと問う。それに対して諒は、

「確かに2年間研究から遠ざかるのはきついと言えばきついものがあります。しかし、戦術機の開発を行う上で自ら操縦し出来を確かめられるというメリットが衛士には有ります。技術廠に入る際にも役に立ちますしね」

「なるほどな。まあ、お前が良いなら私達がとやかく口を出すことでもないか。それと挨拶へ伺う先方へは連絡を入れておきなさい。突然の訪問は礼を失するからな」

「はい、明日連絡を入れてから伺う予定です」

「うむ。それと訓練校への入学に関しては私の方がやっておこう」

「よろしく願います」

諒と一臣の会話が終わるとあやめが手を叩きながら2人に告げる。

「さあ、堅苦しい話はここまでにして料理を冷めないうちに食べて下さい。久しぶりに私が腕を振るったのですから」

「ああ、そうだな」

「母上の手料理を食べるのは久しぶりですので、堪能させて頂きます」

こうして帰国1日目は過ぎていった。

翌日、朝食を取り終わった諒は九条家と篁家へ連絡を入れた後、

以前通っていた道場へ一人で向かっていた。

（そういえば、何ともなしに来てしまったが、以前のセキュリティカードで通れるのだろうか）

諒は帰国した翌日に道場へ赴いており、当然カードの更新等行っていない。そしてカードの発行者である父親は既に軍に行っている。そのため基地内部へ入れるかどうか脳裏に一抹の不安がよぎる。しかし、いざとなれば父親へ確認して貰えばよいと思いなおした。

（まあ駄目だったら父上には悪いが、連絡して貰えばいいか）

そんなことを考えていたら基地のゲートに着き、門番にセキュリティカードの提示を求められる。

「基地への入場にはセキュリティカードを提示して頂いております。セキュリティカードはお持ちですか？」

「ええ、これです。数年更新していませんが問題ありませんか？」

「これは随分前の物ですね。一先ず確認してみますのでお待ち下さい」

そう言って門番の1人が確認の為管理室へ入って行く。諒はただ突っ立っているのも暇なのでもう一人の門番に話しかける。

「しかし、7年ぶりに来ましたが変わった感じがしませんね」

「軍の基地ですから早々変わったたりしませんよ。見えない所では変化しているかもしれません」

「そんなもんですか」

2人で雑談をしていると管理室へ入って行った門番が帰って来た。

「お待たせしました。失礼ながらセキュリティカードが古すぎた為、発行者である深山准将に確認させて頂きました。なお、本日はこのカードで入場して頂いても問題有りませんが、今後の事を考えると早急にカードの更新を行われる事をお勧めします」

「わかりました。御手数掛けて申し訳ありませんでした」

諒はカードを受け取りながら、詫びる。

「いえ、お気になさらないで下さい。それではどうぞご入場下さい」
「ありがとうございます」

諒はもう一度礼を言ってから場内へ入って行く。道場へと向かいながら先ほど言われた件に関して考える。

（セキュリティカードに関しては家に帰ってから父上に話しておくか）

そうして少しばかり歩いて行くと道場が見えてきた。諒は少し立ち止まり懐かしそうに眺めた後建物の中へ入って行く。

———カン、ガン、ガガン
———ダン、ダァン

道場へ繋がる扉の奥からは木刀のぶつかる音や床に叩きつけられる音など聞こえてくる。その音を懐かしそうに聞きながら扉を開けて一礼をしてから入って行く。

「失礼します」

入って行くと以前通っていた時とは随分顔ぶれが変わっていたが、それでも諒を知っている者達も残っており諒に気付いた者が声を掛けてくる。

「おや、随分懐かしい人物が顔を出したな」

「お、本当だ」

「久しぶりだね」

「御無沙汰しております、先輩方」

「確かアメリカに留学中だったと思ったけど、今日はどうしたんだい？」

諒は先輩達にアメリカ留学を終え戻って来て、今日はその挨拶に来た事を伝える。

「実はこの度留学を終え戻りましたので、その挨拶に参りました」

「ん？聞いていた予定より早くないかい？」

「ええ、今年の初めに徴兵年齢が下げられたのに加え、学徒志願兵の募集も始まりましたので予定を切り上げて戻って参りました」

「なるほど。ということは直ぐにでも訓練校に入るのかい？」

「はい、父上が手続きを行うと言っていました」

諒は昨日の夕食時に父親が行っていた事を思い出しながら応じる。
そんな諒の反応に先輩達は呆れる。

「いくら学徒志願兵とは言っても、13歳で訓練校に入る人間は君ぐらいだと思うけどね」

「武家の人間が幼少時から鍛錬をしていて、一般の人間より訓練校に入るのが早いとは言え、それでも中学卒業後だからな」

「本当に君は規格外だなあ」

そんな先輩達に断りを入れ諒はその場を辞す。

「それではまだ師範への挨拶がありますので此処で失礼させていただきます」

「ああ、訓練校に入ってもがんばれよ」

「僅かな期間とはいえ君も此処の門弟なのだから無様な結果は許さないよ」

「まあ、精一杯やってこい」

諒は一礼してその場を去って行くのを見ながら3人は語る。

「しかし、今から訓練校に入るってことは早ければ15かそこらで実戦に出る訳か……」

「本人が望んでいる事とは言っても、それを許してしまったのは我々大人か……」

「ああ、遣り切れんな……」

3人はこの先の事を考え苦い思いで一杯だった。

諒は師範と数人の顔見知りへ挨拶に行った後、家に一度帰ってから今度は簗家へ赴いた。本来であれば先に九条家へ挨拶に向かうべきなのだが先方の都合が悪いということなので後回しになった。また、これから赴く簗家も当主である簗中佐は軍務で都合がつかなかった。そのため次期当主である唯依が代わりに挨拶を受けることになった。

「久しぶり。こうして顔を合わせるのは正月以来だね」

「お久しぶりです諒様。ご無沙汰しております」

「どうせ周りに人もいないんだし、敬語止めてくれない？」

「そういう諒様こそ敬語を止めさせようとするのを止めて下さい」

「唯衣は頑固だな、もう7年も言い続けたのに」

「そう言う諒様も諦めが悪いですよ」

諒と唯衣は挨拶といつも道理のやり取りを終えて軽く笑い合う。

そして唯衣は誕生日プレゼントのお礼を言う。

「諒様、今年も誕生日プレゼントありがとうございます」

「気にしないで。それよりもプレゼントは気に入って頂けたかな？」

「もちろんです！それよりも宜しいのですか宝石何て頂いてしまっても？」

今年諒が送ったプレゼントは、誕生石であるアクアマリンが付いたネックレスであり、送った本人としては無難な物になってしまった為喜んでもらえるか少々不安であった。もともと、光り物にも興味を持ち始める年頃である唯衣からしてみれば、非常に嬉しい贈り物であると同時に宝石が付いていた為、無理させてしまったのではないかと遠慮勝ちであった。

「本人にばらすのもどうかと思うけど、それほど高価な物じゃないから気にしないで」

「そう仰られるなら有難く頂きます」

唯衣はこれ以上気にするのは失礼にあたると思い、礼を言って話を終わらせた。唯衣は諒に戻って来た理由と今後の事を聞く。

「そう言えば、新年の祝賀会の際にはまだ暫くは留学していると仰

っていたのに、突然の帰国だなんてどうなさったのですか？」

「うん、法改正によって軍に入れる様になったから留学を切り上げて戻って来たんだ」

「そうなんですか。でも確か祝賀会の時はもう直ぐ博士号を取る為の研究が始められると楽しそうに仰っていたと思いますが、それはよかったのですか？」

「うん。後は論文を作るだけだから日本でもやれることだし、大丈夫だよ。それに開発衛士になるには衛士になる必要があるし、唯依というライバルがいる以上、早めに軍に入ってアドバンテージを作っておかないとあっさり追いつかれそうだからね」

唯依というライバルがいる以上のんびりとしていられないと笑いながら答える。それを聞いた唯衣はそんなことないと言うが、

「あっさりと追いつく何て出来ませんよ。それどころか置いて行かれない様に私が努力しなければならぬでしょう」

「たぶんそんな事ないと思うけどね。知識面でなら唯依に負けることはないと思ってる。でも、衛士として一番大切な操縦技術に関してはどうなるかわからない。もしかしたら私には才能がないかもしれないし」

「そんな事ないと思いますが」

「お互い戦術機の操縦経験がゼロだから、例えば多少私が先に学んだとしても差は小さいだろうから油断は出来ないさ」

諒はお互い同じスタートラインから始める為油断は出来ないと言う。

2人は日が沈むまで話を続けるのだった。

Phase 02 (後書き)

アメリカ留学編はそのうちおまけでやるかもしれません。

ちなみにアメリカの大学入学に関してはある程度現実世界に則っています。実際に多額の入学金や寄付金等で入学権を買うというものもあるらしいです。そしてそれが所謂裏口などではなく普通に認知されているというのですから文化の違いを感じられますね。

また、作中に1年で高校卒業という異常な進級ペースがありますが、現実世界でソフトバンクの孫社長はアメリカ留学時1週間に1回飛び級していたらしいです。WIKIで調べると経歴が凄まじいですね。作中の主人公が霞みます。

さて、作者がクロニクルズ02をまだクリアしていないので更新が遅れるかもしれません。また、これからの展開にクロニクルズやTE、シュヴァルツエスマーケン等も盛り込めたら楽しいかなと思っています。

それではここまで読んで頂いた方々に最大限の感謝をしながら失礼させていただきます。

Phase 03 (前書き)

長らくお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

また、15000PV、3000ユニークをありがとうございます。
た。

この様な拙い文章を読んいただき誠に感謝の念が絶えません。これからもがんばって書いていくので生温かく見守って頂けると幸いです。

それでは本編をどうぞ

Phase 03

——帝都・とあるオフィスビル——

機能生を重視しつつも品のある応接室で、男は1人物思いに耽っていた。

今日これから対峙する人物は有力武家の人間で、失礼がない様にと若い担当から自分へ回された仕事であり正直最初は気が乗らなかった。それでも仕事と割り切り相手の資料を読んだところその経歴に唾然とした後、気を引き締めた。その経歴が事実であれば今日の対談は気が抜けないものになる気がしたからだ。

物思いに耽っていた男の耳にノックの音が届き、続いて声が聞こえた。

「部長、お客様をお連れしました」

「——通してくれ」

気を引き締めた男は席を立ち、来客を迎え入れる準備をする。

ドアの向こうから秘書に伴われて姿を現した本日の来客に、軽く頭を下げる。

「ようこそいらっしゃいました。本日担当させて頂きます岩崎と申します」

「私は深山諒と申します。本日はお忙しい中、席を設けて頂き感謝致します」

「どうぞお座り下さい」

「それでは失礼します」

そうやって席を進められると諒は岩崎の対面に腰を下ろす。

座の空気を読んだ秘書が2人の前に茶を置き、何を言う事も無く部屋を出て行った。

岩崎は秘書が出て行ったのを見てから話を切り出す。

「さて、本日はご商談とのお話でしたがどのような案件でしょうか？」
「商談は商談ですが、どちらかと言えば企画を提案に来たというのが正しいですね」

「ほう、お聞きかせ願えますかな？」

その発言を聞いた岩崎の目が細まる。

「まずは、これをご覧頂きたい」

「では、失礼して」

MITを卒業した程の男が持って来た内容に興味を持ちながらも、それを面に出さずに企画書を捲る。

室内に紙をめくる音のみが暫し響く。

「これは……随分と大きな企画を提示されましたな」

岩崎がそう呻く様に呟いたのは諒が企画書を差し出してから小一時間経った頃だった。

「この企画書を持ちこんだという事は、勝算があつての事と考えて宜しいのですかな？」

企画書を読み終えた岩崎は諒を鋭く見つめながら問う。

「ええ、勿論です。既に第一段階の要である試作OSは出来ています。後はバグ取りと実機での評価をするだけです。また、第二段階のOSの構想も固まっています」

「成る程……」

手元の企画書を見ながら暫く考えていた岩崎は緊張した面持ちで告げる。

「……これ程大きな計画となれば私の権限の範囲を超えています。申し訳ないですが、上に相談してみますので少々お待ち頂いてもよろしいですか？」

「ええ、元より即決出来るものではないと理解しております」

「ありがとうございます。それでは私は一旦席を外させて頂きます。御茶のお代わりを直ぐに持ってこさせますので暫しお待ち下さい」

そう告げて、岩崎は部屋を出てゆく。

（ふう、食い付きはまずまずといったところだな。とは言え飛鳥計画を抱えている光菱にとって余計なりソースを回す余裕はないだろうな。ここからが正念場だ）

諒が考えことをしていると、秘書がお茶のお代わりを持って入ってくる。

「失礼します」

秘書は茶碗と取り換えると、一礼して部屋を出て行った。

諒がお茶を飲みながらのんびりと時間を潰していると、岩崎が戻って来た。

「お待たせしてしまい申し訳ありません」

「いえ、お気になさらないで下さい。それでどのような結果に？」

岩崎は先ほど上層部が下した決定を告げる。

「御提案頂いたOSのテストをさせて頂きたい。それがこの提案を受ける条件です」

岩崎は諒を見据えながら述べる。

「武家である貴方はご存じかもしれませんが、現在我社は一近衛軍次期主力機開発計画《飛鳥計画》および不知火の生産ラインの整備と余裕がありません。それ故、提示なされているOSの有用性が確認出来なければ、この提案はお受け出来ません」

その提案に諒は少し考え承諾する。

「ええ、その条件で構いません。ただし、契約が締結するまでOSの管理は全て私に任せて頂きたい。テストする際の換装、テスト後のデータ除去は私が行いますが宜しいですか？」

「それは当然の処置ですね。問題ありません。それでは今後の予定を詰めていきましょう」

岩崎はテストの日程や契約締結に向けての準備等の予定を決めてゆこうとする。

それに対し諒は待ったをかける。

「申し訳ありませんが、私は近日中に衛士養成学校に入校しなくてはならない為、可能な限り早期にテストを行いたいのですが、厳しいでしょうか？」

「そうですか……シミュレーターの状態を確認致しますので少々お待ち下さい」

そう言って岩崎は応接室に供えられた電話で何処かに確認をし始める。

「……岩崎です。シミュレーターを使いたいんだが何時なら問題ない？……そうか、少し待ってろ。深山様申し訳ありませんが近日中となると今日以外は少々厳しいのですが、この後テストを行っても宜しいでしょうか？」

岩崎は電話を片手に諒へ問いかける。

それに対し諒もOKを出す。

「ええ、無理を言っているのは私の方なので構いませんよ」

「わかりました。っと、すまないがスタッフとテストパイロットをシミュレータールームに集めておいてくれ。これから少しテストを行うのでな」

岩崎はそう言って電話を切り戻って来た。

「それでは急なことはありませんが、これからテストを行いたいと思います。シミュレータールームまでご案内致します」

「ええ、よろしく願います」

岩崎は諒の前に立ちシミュレータールームに案内してゆく。

シミュレータールームに着くとスタッフとテストパイロットが既に準備を整えて待っていた。

「待たせて悪かったな」

「部長、急なテストとの事です、一体どの様なものですか？」

スタッフの一人が戸惑いながら声を掛けてくる。それに対し岩崎はテスト内容を説明する。

「これから行うテストは試作OSの性能評価だ。評価方法はいつもの評価試験を行う為、特に問題はないだろう」

「わかりました。しかしOSの開発何てやっていましたっけ？」

疑問をぶつけてくるスタッフに対し岩崎は答えを返す。

「これからテストする試作OSはこちらの深山氏が開発したものだ。念のため言っておくが深山氏は既にMITを卒業した程の人物だ。若いからって甘く見ると痛い目を見るぞ」

「今御紹介いただいた深山です。急なテストで申し訳ありませんが一つよろしく願います」

諒はスタッフへ軽く頭を下げる。

岩崎はそれを見て準備に取り掛かる様促す。

「それでは深山様、準備の方に取りかかって頂いてもよろしいですか？」

「わかりました」

諒はスタッフの一人と共に準備に取り掛かる。それを見ながら残

ったスタッフは岩崎に疑問をぶつける。

「しかし部長、使い物になるんですか？その試作OSとやらは？」

「わからん。わからんからテストするんだ。それにもし使い物になった場合我社が得るものは多い。仮にならなくても損失はないんだ」

光菱からしてみれば使い物になればよし。ならなくても部長が相手をしたという事で深山家への顔立ては終えており、今回のテストは重要視していなかった。むしろ使い物になれば儲けもの程度の認識だった。

「まあ、確かにそうですね。しかし彼、何歳なんですか？何か見た目と言動が釣り合っていないんですけど？」

「資料によれば13歳だそうだ」

「13でMIT卒業して戦術機のOS組むってありえないですよ、それ……」

「OSの出来はまだ分からんが、事実なんだ諦めろ。それに、もしかしたらこれから長い付き合いになるかも知れないんだ、失礼な態度を取るなよ」

「わかってますよ」

そんなことを話していると準備に行った諒から声が掛る。

「OSの換装が終わりましたので、試験を始められます。また、現在のOSは試作段階でバグ取りをしていないという事を念頭に置いてテストして頂きたい」

「わかりました。それとテストを行う前に何かありますか？」

「いえ、先入観を持たないでテストして欲しいので1回目はそのままテストして下さい。その後簡単なレクチャーを行い再度テストをさせて頂きたい」

「なるほど。それでは始めましょう。井川、シミュレーターに搭乗してテストを開始しろ」

「了解しました」

そう言って井川と呼ばれたテストパイロットはシミュレーターに登場してゆく。

「それでは、評価試験を開始させて頂きます」

「ええ、よろしく願います」

そうして評価試験が開始された。

試験中暇を持て余した岩崎が諒へOSについて質問する。

「深山様、今回テストしている試作OSは一体どの様な物なのか？差し支えなければお教え頂けませんか？」

「そうですね……概要程度で宜しいでしょうか？」

「ええ構いません。私は専門家ではないので、詳しく言われた所で理解出来ませんので」

岩崎は苦笑しながら諒へ答える。

それを聞いた諒は僅かに考え、語り出す。

「試作OSは所謂操縦系のOSを改修したもので、既存のOSを整理・統合させることによりOSをスリム化・高速化させ、浮いたりソースを独立した演算領域とし、並列処理させることで処理速度を上げました。簡単に言えば最適化したうえで、小さいながらも、もう一つコンピュータを搭載させた様なものです」

「なるほど」

「現在までの戦術機の発展はハード側および機体制御系のOSによるものです。つまり操縦系のOSは撃震F₄のものから大して変化がな

いのです。私の考えが正しければ従来の物に比べて即応性が2%、3%程度上がるはずです」

「なっ！」

「また、新しいシステムを1つ入れてあり、操作性の向上も出来ていると思います。操縦性の向上は数値上では表れ難いかもしれませんが、現場では大きな成果が出ると考えています」

「失礼ながら、もしそれが事実であれば戦術機開発において革命的な物になりますよ」

岩崎は諒の説明を聞き興奮する。

そんな岩崎に諒は己の考えを述べる。

「ええ、そうなって貰わないとなりません。このOSで帝国を含む世界中の戦術機の性能を底上げする予定なのですから」

「計画書にもありましたが、何故輸出を？技術盗用される可能性が高いでしょうに」

「一つ目は戦線後退に歯止めを、それが不可能ならば遅延させたい。そして大陸派兵による国力の低下の防止。2つ目は投資用の外貨を稼ぐことです。我が国は無資源国家故、これから先生き残って行くには技術力を付けなければなりません」

「確かに無資源国家というのはそれだけで弱者ですからな」

「それに、製品として販売する際は、徹底的にプロテクトを掛けた上でブラックボックス化させますので大丈夫ですよ」

そんな事を話していた2人に声が掛る。

「部長、深山様、評価試験が終了しました」

「そうか。それで結果は？」

「はい。深山様が仰られた通りバグが存在したため、正確な比較は出来ないのですが、それでも既存のOSを超える性能を示しました」

「そうか、そのデータはあるか？」

「はい、こちらになります」

「ふむ……深山様、テストは2回行くと仰りましたが、その必要はなさそうです」

「それはどういことですか？」

「今回のテストで得られたデータだけで説得力がありました。上に確認してみないといけません、このまま契約を締結することになると思います」

岩崎はスタッフからデータを受け取りその内容を見てから諒に告げる。そして諒へ休憩も兼ねて食事を促す。

「私は上にこの結果を報告し決議を取ってきますので、深山様はご休憩も兼ねてお食事でもいかがですか？社員食堂でよろしければ案内させますが？」

「それではお言葉に甘えさせて頂きます」

諒はまだまだ先は長いと判断し食事を取りながら休憩することにした。

それを聞いて頷いた岩崎は案内役を紹介する。

「井川、お前が深山様を案内しろ」

「わかりました。直ぐに着替えてきます」

「余り急がなくてもいいですよ。私はシミュレーターからOSを抜く作業が残っていますので」

「いえ、お待たせする訳にはいきません。直ぐ着替えて来ますので少々お待ち下さい」

そう言って井川は早足で更衣室へ向かって行った。
それを見ながら岩崎は井川を選んだ理由を告げる。

「テストをした彼女であれば色々聞く事も出来るでしょう」

「御配慮感謝します」

「いえ、それでは私は此処で失礼します」

岩崎はデータを持ってシミュレータールームを立ち去って行った。それを見ていた諒はOSを抜き取る作業に取り掛かろうとする。

「それでは、OSを抜いていきましようか」

「お付き合い致します」

諒とスタッフの一人はシミュレーターに向かって歩いて行く。

20分程度経ち諒達の下に着替えに行っていた井川が戻って来る。

「お待たせしました」

「いえ、大丈夫ですよ。私の作業も、もう少しで終わりますので少々お待ち下さい」

「はい」

諒はOSを抜いた後データが残っていないかの確認作業を終えると井川に声を掛ける。

「お待たせしました」

「いえ、それでは食堂に御案内致します」

「よろしく願います」

井川が先導しながら食堂を目指してゆく。

その後、光菱と諒は正式に契約を締結した。契約は今後の戦術機開発や国際状況を見据え、資金援助という形で技術開発が促進することを諒が強く望んだ結果、純利益の4割を演算装置関連の開発に、戦術機関連の技術開発に更に4割、残りの2割を光菱と諒が等分するという形に落ち着いた。また、計画の第2段階には高性能演算装置が必要となる為、2年程開発期間を設けることとなった。また2年後には諒が既に軍人になっていることが予想されるため、その時になったら契約を見直したうえで更新するという形をとった。

「本日はありがとうございました」

「こちらこそ、大変貴重な契約を結ばせて頂き、誠に感謝いたします」

「それでは、これからよろしく願います」

「こちらこそよろしく願います」

諒と岩崎は確りと握手をする。

そこで諒がふと言葉を発する。

「そう言えば岩崎さん。もうひとつ儲け話が有りますが、如何ですか？」

「是非お聞かせ願いたいですな」

諒が発した言葉に岩崎は嬉々として答える。

「そうですか。それでは」

諒が提案した内容は第1世代および第2世代戦術機の改修に纏わる話であった。第3世代機に用いられている代表的な技術に一オペレーション・バイ・ライト《OBL》という技術があるが、現在第3世代機の開発を行っている米国およびEUでも使用され、何れ技

術価値が相対的に低下してしまう。よって他国が第3世代機を完成させる前にFBLシステムを改修キットという形で販売してはどうかという提案をする。

それに対し岩崎は難しい顔をする。

「魅力的な話ではあるのですが、それについては河崎、富嶽および軍にも話を付けなければなりません。河崎、富嶽はおそらく問題ないと思うのですが、軍が国防という点で最新技術を国外輸出することを許可するかどうかは難しいところですね」

「改修キットと話しましたが、要は導線を光ファイバーに置き換えるだけのことから、それほど問題にはならないはずです。それに加え、国内で生産したものを輸出すれば軍も過敏に反応しないのでは？」

「なるほど、確かにそれなら軍からの許可も得やすくなるでしょう」

「それに、この改修キットは初期費用を抑えられるのがメリットですね」

「そうですね。撃震^{F-4}および陽炎^{F-15}の研究は瑞鶴および不知火を開発する際にしていますからね」

「それだけではなく、光ファイバーの増産も、現在の生産ラインをフル稼働させたうえで、足らなければラインを増やせばよく、ここでも費用が抑えられます。もっと言えば増産に伴って雇用を創出出来るところもいいですね」

岩崎は軍や他社と早急に相談することを決める。

「この件については早急に連絡を取ってみましょう」

「ええ、これはスピードが勝負の鍵になりますからね」

「この件については今後どのようにすればよろしいですか？」

岩崎はこの話はどの様に進めれば良いか諒へ問うと、諒は自分を

通す必要は無いという。

「この件は御社の方でご自由に動いて頂いて構いません」

「よろしいのですか？」

「ええ、今回随分とこちらの我ままを聞いて頂いたので、其のお詫びになればということで」

「そうですか、御厚意に感謝します」

「敢て一言付け加えるならば、販売価格を安くすることが重要でしょう」

「ふむ」

「高く設定して、販売数が伸びなければそれ程利益が上がらないと思います。例え薄利多売になったとしても、他国が第3世代機を出す前にその部分のシェアを握ってしまえばアフターマーケットで継続的に利益が上げられますので、そちらの方が長い目で見れば良いかと」

「貴重な御助言感謝します」

「いえ、これから共に歩む同士が成長することは、私にとっても意味のあることです。お気になさらないで下さい」

2人は席から立ちあがり、再び握手をする。

「それでは、OSの機密管理だけは確りとお願ひします。米国当たりのスパイに漏れたら計画が全て御破算ですので」

「その辺りは心得ております。関わる人間は徹底的に洗った上で関わらせますので、御安心下さい」

「それでは、バグ取りが終わった時点で連絡を下さい。そしたらプロテクトとブラックボックス化を施しますので」

「わかりました。ご連絡はどちらに入ればよろしいですか？訓練校に入学されると仰っていましたか？」

「そうですね……一先ず実家の方へ連絡を頂けますか？」

「わかりました。ではその様に致します」

「それでは失礼します」

諒はそう礼をして応接室を去って行った。

残された岩崎はこれからの事に思いを馳せていた。

（さて、調査部に人事部、開発部に特許部……それと、今から販路についても考えておく必要があるな。忙しくなりそうだ）

忙しくなると思っていながらも、世界を驚かせる商品に関わるだけあって岩崎は楽しそうであった。

——日本帝国斯衛軍衛士養成学校——

「私が今日から貴様の訓練を担当する神崎だ」

諒の目の前に立った男がそう名乗る。

「私は深山諒と申します。御指導度鞭撻の程宜しくお願い致します」
「まずこれだけは言っておこう」

そう言って神崎は諒を鋭く見つめながら語る。

「ここでは出自、経歴等無意味だ。貴様が深山家の人間であろうと、大学を出ていようと何の意味も持たない。今の貴様は軍人としてヒョッコ以前なのだからな」

「それ故、我々は差別もしなければ区別もしない、評価は全て公正

公平につける」

「――はッ！」

神崎は薄く笑い話を続ける。

「結構、では事務的な話に移ろう」

「まず、貴様が所属する部隊だが第10班だ。この班は人数の関係上3名で構成されている。そのため、貴様にはここに所属して貰う訳だが、貴様は途中入校のため、知識・技能・経験どれもが欠如している」

神崎はつらつらと話を続ける。

「貴様は知らないだろうが、秋には総合戦闘技術評価演習が待っている。これは任務遂行に必要な技能が身に付いているか評価する場だ。そして衛士になる為に避けて通れない道でもある。なお、この演習は部隊として評価される。つまり、現状の貴様が第10班に入ったところで足手まといでしかなく、その結果第10班の演習結果が悪化することが予想される」

諒は神崎の話を聞きながら納得していた。

（確かに剣術と近接武術の鍛錬はしてきたが、射撃訓練や戦術等の勉強はしていないからな）

「そこで、これから暫く私とマンツーマンの通常訓練に加えて特別訓練を行い、必要最低限の知識・技能が身に付いたと私が判断した時点で第10班へ合流させる」

「――はッ！ ご高配感謝致します」

「貴様の出来次第だが、これから暫く貴様に自由が有ると思うなよ」

神崎はニヤリと笑って見せる。

「さて、連絡事項も伝えたところで、施設を案内する。付いてこい」
「――はッ！」

神崎と諒はグラウンド、医務室、座学を行う教室、格納庫と訓練校内を歩き回る。

「此処がPX、食堂と売店を合わせた様なものだ。貴様もここで食事を取る事になる。また、支給品以外の物を購入したい場合はその売店で購入しろ。ない場合は注文する事も可能だ。最も注文品は全てチェックされるがな」

「――はッ！」

「先ほども言ったが、貴様が第10班に合流したら貴様を含めた班として評価される。その際、貴様が途中入学だから甘くなるという事は無い。班として行動する為には班員とのコミュニケーションや信頼関係が重要となる。よって、早々に他の訓練生と顔合わせを行い、信頼関係を築いておけ」

「御助言痛み入ります」

「よし、次はシミュレータールームに向かう。午後には戦術機の適正検査を行うから場所は確りと覚えておけ」

「――はッ！」

シミュレータールームに向かっている途中神崎が思い出したかのように口を開く。

「そういえば貴様はMITを卒業しているのだったな」

「はッ、学士学位を取得し、現在は博士課程の博士研究を残して休

学しております」

「ふむ、何を学んでいたのだ？」

「電子制御工学をメインとして戦術機のソフトに関する分野を主に学んでいました」

「ほう、珍しいな。戦術機開発に関わりたがる連中は大概ハード側に興味を持つのだがな」

「そうかもしれませんが。しかし、人と違うアプローチをすることで新たな発見や進歩があると考えております」

他人と同じ事をやっても意味がないと言う諒に対し、

「……ふん、一端の口を叩く。まあ、エンジニアとしては既に一人前なのかもしれないが、それを衛士として活かすには、まず戦術機に乗れる様にならねばならんな」

「はッ、心得ております」

2人が話をしているとシミュレータールームに付く。

「此処がシミュレータールームだ。総戦技演習を終えれば此処で戦術機の演習を行う様になる。貴様の場合今日だが、入学時と総戦技演習後の2回ここで戦術機特性検査を行う。詳しくは午後説明するが簡単に言えば揺れに対してどの程度耐性があるかを判定するものだ」

諒は興味深げにシミュレーターを眺める。

「さて、ここでの説明はこの程度だな。最後になるが貴様の部屋に案内する」

「――はッ！」

「貴様が今日から使う部屋だが本来であれば相部屋なのだが、現在

男子は綺麗に収まってしまっている為、貴様は2人部屋を1人で使ってもらう」

「また、貴様の部屋にはBDUや教本等支給品が既に有るはずだ。この案内が終了後まずはそれを確認しろ。サイズ変更や欠品があれば事務室の方へ届け出ろ」

「了解しました」

2人は訓練施設や座学用の教室がある棟から訓練生が寝泊まりする宿舎へ移動してゆく。

代わり映えのない宿舎の中を暫し歩いていると、神崎がとある部屋の前で立ち止まる。

「此処が貴様が使う部屋だ」

「それと、IDを渡しておく」

「――はッ！　ありがとうございます」

「カードを見ろ。表のチップには貴様のIDが登録されている。それが貴様の身分を証明し、この訓練校での安全と生活を保障する生命線だ」

諒はカードを受け取り説明を聞く。

「ドリンクディスプレイから各ゲートはもちろん、部屋の出入りの際には必ずそれを使う。肌身離さず持ち歩く事――いいな」

「――はッ！」

「紛失した場合再発行は可能だが厳罰付きでの再発行だ――無くすなよ」

「――はッ！」

「結構。では今後の予定を伝える。この後は自由時間、1300時

よりシミュレータールームにて戦術機特性検査を行う。その際服装は強化装備で来い。着方は教本を読んでおけ。その後の予定についてはその時伝える。最後に明日以降0430時に点呼を行う。――以上、何か質問はあるか？」

「ありません」

「では、解散」

「――はッ！」

諒は神崎に対し敬礼する。神崎も返礼しその場を立ち去って行く。諒は神崎が立ち去ったのを確認すると部屋へと入って行く。

（今は11時を少し回ったところか。さっさと確認作業を済ませて食事を済ませておくか。確か207の全員、特性検査では袋の御世話になっていた。早めに食べておかないとああなりかねない）

諒はそう考え、支給品の確認と持って来た物の整理を始める。

（これが教本でこれがBDUでこれが軍靴で……よし、サイズ変更と欠品はないな。作業は終わったし……PXに行って食事を取るか）

確認作業と荷物整理は20分程度で終わり、諒はうろ覚えな記憶を頼りに進んで行く。

（確か此処の通路をこっちで……お、合ってた）

無事食堂に着いた事に安堵しながら、昼食を注文する。

「すみません、鯖の味噌煮定食を下さい」

「少し待ってな」

待つ事2分少々

「はいよ、お待ちどうさま」

「ありがとうございます」

（さて、どこに座っても構わないものなのだろうか？まあ、何処でも構わないか）

食事を受け取った諒は何処に座るか思案するが、直ぐにその思考を切り捨て、空いている席に着き食事を始める。

「――頂きます」

もぐもぐもぐ……ゴクリ。

話す相手もない為、黙々と食事を進めてゆく。

「――ご馳走様でした」

（……出来れば他の訓練生達と顔合わせしておきたかったが、今は部屋に戻って教本を読まなければならぬからな。夕食の時にでも会えればいいが……）

諒はそんな事を考えながら食器を片づけPXを去った。

「ねえ薫、同期にあの人って居たっけ？」

「いや、見た事ない顔だ」

「しかし木本は何でいきなりそんな事を言い出したんだ？」

「近藤の言う通り、確かに唐突だな。一体どうした？」

「ほら、今朝教官から私達の班に1人入るって言ってたじゃない？」

「確かに言っていたが、彼が件の人物だとは分からないぞ？それに班に合流するのは暫く先の話だったと記憶しているが」

「ああ、噂だと暫くの間神崎教官が直々にマンツーマンレッスンをするらしいぜ」

「うっわ、その人ご愁傷様だわ」

神崎とのマンツーマンだと聞き憐れむ彼女に対し、

「確かに神崎教官の訓練は厳しいからな。だが逆に言えば神崎教官を宛てても問題ない程なのかもしれんぞ」

「俺達にしてみれば総戦技演習で組む訳だから可能な限り優秀であつてほしいもんだな」

「そうよねえ」

「総戦技演習か……だとすれば早めに顔合わせするべきだな。夕飯の時食堂に居れば声を掛けてみるのも良いだろう」

「あら、薫は随分やる気ね」

「悠里……君が何を考えているか何となく察しは付くが、違うと言っておく。真面目な話、この時期に新しい班員が増えるというのは不安要素でしかない。能力面はチームワークでカバー出来る。だが、ないとは思うが人格面で少々難があった場合を考えると……残り2カ月弱でどれ程の纏りを得られるかわからないからな」

「確かにな」

「でも、ここにいてるってことは武家の人間でしょ？剣術は家で習っているだろうし、人格面でも余程酷いってことはないと思うわよ？」

「それはそうだろうが……実際に言葉を交わしてみない事には何もわからないさ」

「それじゃ、夕飯の時いれば声掛けてみようぜ」

「ええ、そうしましょ」

「さて、私達もそろそろ行くでしょう。午後の座学に遅れる訳にはいかないからな」

「あいよ」

3人はそう言って食器を片づけ食堂を出て行った。

——シミュレータールーム——

「さて、これから貴様の特性試験を行って行く訳だが、余程低くないければ弾かれることはない。逆に結果が良かったからといって優れていると言う訳ではない。あくまで特性がどの程度あるかを見るものであり、これからの訓練次第で結果が変わる事もある。気楽にいけ」

「それと、昼飯は食ったか？」

「はッ、頂きました」

「そうか……では搭乗前にこいつを渡しておく。気分が悪くなったら迷わず使え。シミュレーター内にぶちまけられても迷惑だからな」
「ありがとうございます」

「適正試験と言っても貴様がする事は何もない。ただシミュレーターに搭乗し着座していればいい。後の事は全てこちらでやる。それでは1号機に搭乗しろ」

「はッ、了解しました！」

諒はシミュレーターを繁々と興味深そうに見ながら乗り込んでゆく。

（へえ、中はこういう風になっているのか。座り心地も悪くない、
というか思った以上に快適そうだな）

諒が感心するのも当然である。

衛士は長時間コクピットという閉塞空間に拘束されるうえに、体を満足に動かせない為、疲労やストレスが溜まり易い。疲労やストレスは士気等にも大いに関係するため、衛士への負担を極力減らすべく、戦術機のコクピットは人間工学の粋を集めて作られている。感心している諒へ神崎から通信が入る。

「深山聞こえているか？」

「はッ、聞こえております」

「これからシミュレーターを起動させる。最初は網膜投射に慣れんかもしれんが我慢しろ」

「了解しました」

「それではシミュレーター起動……深山問題ないな？」

「はッ、問題ありません」

「それでは、これより特性検査を開始する」

・
・
・

（確かに揺れる、でも所謂テーマパークの3Dアトラクションに毛が生えた程度の様な気が……確か同じ様な感想を白銀も抱いていたな。知ってるか知らないかの差でこうまで違うのか？……でもまあ、乗り物酔い自体が認識と体感の誤差から来るものだから、揺れるものとして認識していればこんなものなのかも知れないな）

・
・
・

「以上で検査を終了する。降りて来い」

「はッ、了解しました」

諒がシミュレーターから降りて来る時の歩調が確りしている事に、

神崎は驚きながら声をかける。

「深山、貴様平気なのか？」

「はッ、特に問題ありません」

「ほう、大した化け物っぷりだ。大概の者は袋のお世話になった上で、まともに立てなかったり、酷い場合シミュレータから出てこれなくなるからな」

「は、はぁ」

「まあ、問題ないならそれで構わん。さて貴様の適正だがAだ。ちなみにA判定というのは最高レベルで帝国でも殆ど居ない。もっとも先ほども言ったが適正が高いからと言って優秀だという訳ではないから浮かれるなよ」

「――はッ！」

「さて、これで検査は終了だ。この後予定だが、1400時より座学を行う。場所は案内した際に教えた所だ。それと今日つけた強化装備は貴様の個人の物となった。自分で管理しろ」

「――以上。解散」

「――はッ！」

神崎は返礼しシミュレータールームの片づけを始める。諒はそれを横目に更衣室へと向かう。

諒は更衣室に着くと備え付けられている椅子にドサリと体を預ける。

「ふう」

（やはり、知識として知っているのと経験するのでは違うな。恐らく実際に操縦するとなったらもっとそれを痛感しそうだ。いや、余計な事を考えてないで直近に迫ってきている総合評価演習をパスす

る事を考えないと駄目だな。操縦について考えるのはパスしてからで十分だ)

「……さて、さっさと着替えて教室に行くか」

——教室——

「……である様にこの場合この地形を活かしながらの行軍となる。また、敵との遭遇が予想される場合……となる。ふむ、そろそろ時間か。切りもいいし一旦食事休憩だ。2000時より講義を再開する。それまでに食事を済ませておけ」

「——はッ！　ありがとうございます」

(さて、夕食を取りに行くか。にしても触り程度のことしかやっけないが戦術・戦略論は結構面白いな。でもまあ、油断せずにくるか。留学中も油断して慌てた事もある訳だし)

諒さ先ほどまで習っていた戦略・戦術の授業内容を思い出しながら、新しい知識を得ることに楽しみを見出していた。

(さて、夕飯はどうするか……)

——ガヤガヤ、ガヤガヤ

「すみません、鮭定食下さい」

「はいよ、少し待ってな」

（昼間は会えなかったが、この時間に班員に挨拶ぐらいはしておきたいものだが……）

「はいよ、鮭定食お待たせ」

「ありがとうございます」

昼間とは違い多くの訓練生達が各々仲のいい者同士集まって食事を取っており、空いてる席は入り口から遠い所等ばかりであった。

（壁際でいいか）

壁際に空いている席を見つけた諒は席に着き食事を始める。

「――頂きます」

――モグモグ、モグモグ

（挨拶するにしても顔が分からない以上誰かに聞かなければならなし、食事中の者に聞いて回るのも失礼だな。それに余り目立ちたくない……やれやれ前途多難だな）

――モグモグ、ズズ

（いや、後で教官に班員のプロフィールを教えて貰うか？最悪顔写真だけでも見せて貰えば良い訳だし、その程度なら問題ないだろう）

「失礼、此処よろしいかな？」

「っと、ええどうぞ」

「それじゃあ、失礼するわね」

「失礼する」

「邪魔するぜ」

諒に声を掛けてきた3人組は、そう断って席に着く。

（さて、どうしたものか……これを機にこちらから質問してみるか。いつまで受け身でいても仕方がない）

「失礼ですが、あなた方は1回生の方々ですか？」

「ええそうよ。そういう貴男は途中入校してきた人でいいのかしら？」

諒は思わぬ切り返しに内心驚きながら応じる。

「ええ、そうです。しかし私が途中入校だとよく気付きましたね」
「そらまあ、訓練生は総数約100人、1回生に限れば39人しかないんだ。顔ぐらい覚えるさ」

「そういうことだ。そんな中で知らない顔があれば気にもなるさ」

「それに、教官から新人が1人入ったって聞いたから余計よ」

「なるほど、そういうことでしたか」

納得がいったのか諒は頷きながら答える。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私は木本悠里、此処では第10班に所属していて、近衛では白を許されているわ」

「俺は近藤一、第10班所属で一応班長なんてものを任されている。それと家柄としては木本と同じく白を許されている」

「最後に私だな。私は籐堂薫、2人と同じく第10班に所属していて、3人の中では唯一山吹を許されている」

「ご丁寧にどうも。私は深山諒、近衛では赤を許されています。そ

れと既にお分かりかもしれませんが第10班に配属予定です」

諒が深山と言った時点で3人は席を立ち頭を下げる。

「「失礼致しました」」

「ん？ああ、家の事ですか？でしたら別に気になさなくても結構ですよ。教官曰く此処じゃ出自は関係ないそうですから」

「そ、そう言って貰えると助かるわ」

「助かるぜ。訓練校内でまで息苦しいのは勘弁してほしいからな」

近藤の軽い発言を聞き咎めた籐堂は、近藤を軽く睨む。

「……近藤」

「そう睨むなよ。いいじゃねえか本人が許可してるんだし。深山もそう思うよな？」

「さっきも言いましたが、私は別に気にしませんよ。まあ、流石にTPOは弁えて貰いたいですが」

「俺だってそのくらいは理解してるさ」

「はあ……しかし本当に宜しいのですか深山様？」

「ええ、籐堂さんも敬称とか敬語は使わなくて構いませんよ」

「それでしたら、私を含めこの2人の事も呼び捨てにして頂いて構いません」

「そうですか？ 歳上ですから呼び捨てはどうかと思ったのですが……」

悠里は歳上だと言われて気になった事を聞いてみる。

「そう言えば深山君は歳いくつなの？まだ、中学生ぐらいに見えるけど」

「今年で14になります」

「今年でつてことはまだ13つてことだろ？つてことは中学2年か……オイオイ本当かよ」

「歳下っぽいとは思ってたけどまさか本当に歳下だったとは思わなかったわ」

「しかしその歳だとまだ義務教育を受けている筈では？いくら法改正が行われたとはいえ、義務教育期間の人間が軍に入れるとは思えないのだが」

「ああ、私は飛び級で既に中学を卒業していますので、特例として入校させて頂きました」

薫の疑問に諒はあっさりと答えるが、その解答は3人を驚かせるには十分すぎた。

「飛び級って凄いわね。あれ？でも帝国に飛び級制度ってなかったわよね？」

「ああ、私の記憶している限り義務教育期間の飛び級制度は存在しないはずだ」

「ええ、その認識で間違いないですよ。ただ、私はアメリカに留学していたのであちらで飛び級しました」

「何で態々留学したのかしら？」

「時間は有限で、多くの事を学ぶには飛び級制度が必要だったからです」

「多くの事を学ぶ為って……というかよく留学が許されたわね。その言い方だと短期間ではなかったのでしょうか？」

悠里は諒の言葉のニュアンスから短期留学ではなく、長期留学だったのではと問いかける。

「ええ、7年ほど向こうに留学していました。っと済みませんが私はここで失礼させてもらいます」

「ん？深山この後何か予定でも？」

「この後、2000時から講義があるので」

「え？これから？」

「ええ、教官曰く暫くの間食事と睡眠以外の自由時間はないそうなので。それでは失礼します」

諒はそう挨拶をして食堂を去って行った。

「いやはや、何とも凄そうな奴だったな」

「ええそうね。そう言えば薫、さっきから何か考えているみたいだけど、どうしたの？」

「いや。彼について考えていたのだが、私の記憶が正しければ彼はとてつもない人物だぞ」

「それってどういう意味だ？」

「そうね」

薫は軽く思案してから2人に話す。

「彼はさっき深山と言っただろう？ 以前というか、もう7年近く

も昔の事だが武家の中で深山の名前が話題に上がった事が有るんだ」

「武家の中で？私は聞いた事がないけど近藤は知ってるかしら？」

「いや、俺も聞いた事がないな」

「それは仕方がなからう。話題になったと言っても一部の武家の間で、しかも極々短期間の話だ」

2人はそれを聞いて首をかしげる。

「概要としては深山家の二男は優秀だというありふれたものだ。：

…当時それを知った私の親は彼を見習いなさいと言ってきたものだ」

「ねえ薫、それだけだと何が彼をそう言わせたのか分からないわよ」

「ああ、すまないな。彼がそう言われたのは、僅か6歳で戦術機の教本を読み、勉強していた所だ」

「……え？嘘でしょ？」

「なあ籐堂、それ冗談としては面白くないぞ？」

「私の知る限りこの話は本当だ」

3人は黙り込んでしまう。

そんな沈黙を破る様に悠里が声をあげる。

「ま、まあこれから班員として顔を合わせる機会も増える訳だし、何れ折を見て聞いてみましょう」

「あ、ああ、そうだな」

そんな事を言っている2人を後目に薫は別の事を考えていた。

（人柄は特に問題なかった。後は能力面だが、合流するまで実際に見れないのは厳しいな。現状出来る事は会話を通じて信頼関係を築いていく事か）

3人はその後ものんびりとPXで話をしながら過ごすのだった。

Phase 03 (後書き)

前回の投稿から1カ月近く経ってしまいました。言い訳をさせて頂くと、リアルが少々忙しくて執筆の時間が中々取れなかったことが一つと、既にプロットを外れかけているため修正に時間が掛った事が原因です。

クロニクル02をやっていたから遅れた訳ではありませんよ？ええ本当に……

待って頂いた皆様にはこの場を借りてもう一度お詫びいたします。

それではここまで読んで頂いた方々に最大限の感謝をしながら失礼させていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9409w/>

MUV-LUV Alternative The unsung heroes of the war

2011年11月8日22時36分発行